第５章　文の構造

この章では，スンバワ語の文の構造について述べる。構成は以下のとおりである。

1 文の成分と構成要素
　1.1 述部
　1.2 述部以外の成分
　1.3 文の構成要素の分布
2 名詞句
　2.1 名詞句の主要部
　2.2 人名を表す固有名詞を含む名詞句
　2.3 主要部に後続する要素（修飾成分）
　2.4 名詞句の並列
3 副詞句
4 前置詞句
5 動詞以外が文の主要部である文
　5.1 名詞句が述部の主要部である文
　5.2 副詞句が述部の主要部である文
　5.3 前置詞句が述部の主要部である文
6 動詞句が述部の主要部である文
　6.1 成分
　6.2 述部の構造
　6.3 補語
　6.4 自動詞構文と他動詞構文
　6.5 主語と目的語
　6.6 例外的な自動詞の構文
　6.7 動作の影響を受ける事物が二つ想定できる状況を表す文
　6.8 他動詞の直後に現れる要素
7 副詞成分
8 名詞節
　8.1 名詞節形成詞 *adè* が形成する名詞節
　8.2 名詞節形成詞 *lók* が形成する名詞節
9 動詞連続
10 複数の文の成分に現れる要素（否定詞、叙法辞、限定詞）
　10.1 否定詞
　10.2 限定詞
　10.3 叙法辞

1　文の成分と構成要素

1.1　述部

スンバワ語の文に必須の成分は、その発話が表す状況の中核を表す部分一つだけである。これを文の述部と呼ぶ。述部の主要部には、名詞を主要部とする句（名詞句）、動詞を主要部とする句（動詞句）、副詞などを主要部とする句（副詞句）、名詞句に前置詞が先行した句（前置詞句）が現れうる[1]。それぞれの例を(1)-(4)に挙げる。

(1)　***tau=Empang***　*dèan*
person=Empang　that　「彼はEmpangの人だ。」

(2)　***mólé'***　*nya.*
go　3　「彼はラペに行く。」

(3)　***mèsa-mèsa'***　*nya*
alone　3　「彼はひとりぼっちだ。」

(4)　***pang'***　***balé***　*aku*
at　house　1SG.LOW　「私は家にいる。」

1.2　述部以外の成分

述部以外の文の成分は、名詞句、副詞句、前置詞句のいずれかの形で現れる。おおまかにいうと、名詞句は述部の表す内容と密接な関係を持つ事物を表し、副詞句は名詞句と述部の表す状況の背景を表す。

前置詞については以下のことが言える。前置詞句のうち、場所を表すもの（前置詞 *pang'*、または鼻音前置詞 *N* を含むもの）は、意味的に副詞句に近い機能を持ち、また、他の成分との共起などの面でも(多くの)副詞句と似た性質を持つ。一方、*pang'*と鼻音前置詞以外を含む前置詞句は、比較的名詞句に近い機能を持つ。（この点については、本章 4 で詳しく述べる。）

このため、本稿では、述部以外の文の成分のうち、副詞句と場所を表す前置詞句を副詞成分と呼び、その他の要素（名詞句と場所以外を表す前置詞句）を補語と呼ぶことにする。また、補語のうち名詞句の形で現れるものを名詞句補語、前置詞句の形で現れるものを前置詞句補語と呼ぶ。

1　名詞句、副詞句、動詞句はそれぞれ単独の名詞、副詞、動詞からなる場合もあるが、文の構成要素をいうときは、そのような場合も、名詞句、副詞句、動詞句と呼ぶ。

1.3　文の構成要素の分布

1.1, 1.2 で述べたことを整理すると以下のようになる。文は述部、補語、副詞成分の三つの成分から成り、それぞれを構成する要素には動詞句、名詞句、前置詞句、副詞句の四つがある。構成要素の分布は以下のようになる。

構成要素	文の成分
動詞句	述部
名詞句	述部　補語
場所を表す前置詞句	述部　副詞成分
場所以外を表す前置詞句[2]	述部　補語
副詞句	述部　副詞成分

以下の部分では、まず、2〜4 で文の成分を構成する名詞句、前置詞句、副詞句の構造について述べ、5 および 6 で文の構造を述部のタイプごとに述べる。（文の構成要素のうち、動詞句については動詞を述部とする文の項(第 6 節)で述べる。）ただし、5 および 6 では文の成分のうち述部と補語の現れ方を中心に扱い、副詞成分については 7 でまとめて述べる。

2　名詞句

名詞句は次の[1][2][3][4]の機能を持つ。

[1] 文の補語として機能する。(5.1-5.3, 6.3)

[2] 名詞句内の修飾成分として機能する。(2.3.1)

[3] 述部として機能する。(5.1)

[4] 前置詞に後続して前置詞句を形成する。(4)

名詞句に必須の要素は名詞句全体の意味の中心となる事物を表す名詞だけである。この名詞を名詞句の主要部と呼ぶ。主要部が表す内容を修飾する要素は主要部の後に現れる。（以下の部分ではこの要素を修飾成分と呼ぶ。）名詞句の構造を図式化すると以下のようになる。

［主要部］（修飾成分）

以下の部分でそれぞれの要素について述べる。

2.1　名詞句の主要部

主要部に現れうる要素には，名詞，人称詞，指示詞，数量詞、名詞節形成詞がある。名詞

2　この言語には 11 個の前置詞句がある。述部を構成するのは場所を表す鼻音前置詞*N*, 前置詞*pang’*の他、起点を表す*kaléng, kalés*などいくつかに限られる。この点については 4 で述べる。

以外の成分が主要部である場合について、以下に例を示す。

2.1.1　人称詞

表 5-1 に名詞句の主要部として現れる形（人称詞）を挙げる[3]。

表 5-1　人称詞

<table>
<tr><td></td><td colspan="3">単数</td><td rowspan="2">複数</td></tr>
<tr><td></td><td>普通体</td><td>敬体</td><td>最敬体</td></tr>
<tr><td>1</td><td>aku</td><td>kaji</td><td>kajulén</td><td>kita（包括形）
kami（排除形）</td></tr>
<tr><td>2</td><td>kau</td><td>sia</td><td>kelépé または
kelépé-kaji</td><td rowspan="3">nènè
(場面指示)</td></tr>
<tr><td rowspan="2">3</td><td colspan="3">nya（文脈指示）
（dèta/ dèan など（文脈指示、場面指示））</td></tr>
<tr><td colspan="2">diri「自身」＋指示詞
(diri=nan「そのお方」など）</td></tr>
</table>

人称詞は通常は単独で名詞句を形成するが、指示詞や動詞の修飾を受ける場合もある。

(5)　*aku=ta*
　　1SG.LOW=this　「この私」

(6)　*kau=balong*
　　2SG.LOW=good　「よいお前」（呼びかけるときの決まり文句）

各カテゴリーの指す範囲

人称詞は原則として、指示対象が話し手であるもの（1 人称）、聞き手であるもの（2 人称）、話し手でも聞き手でもないもの第三者であるもの（3 人称）に分類される。ただし、以下に述べるように、いくつかの人称にまたがる要素も存在する。

話し手を含む要素には、話し手だけを指示するもの（1 人称単数）の他に、話し手と聞き手を含む複数の対象（第三者も含まれうる）を指す形 *kita*（1 人称複数包括形）と話し手を含み、聞き手を含まない複数の対象（必然的に第三者を含む）を指す形 *kami* (1 人称複数排除形）がある。

聞き手を含む要素には、聞き手だけを指示するもの（2 人称単数）と上記の 1 人称複数包括形の他、発話の場に存在する話者以外の複数の人物を指す *nènè* がある。*nènè* は発話の場に存在する、話者以外の複数の人を指す語で、聞き手は指示対象に含まれている場合も含ま

3　人称を表す要素は名詞句の主要部として現れる他に、次の[1][2]の環境に現れる。
[1] 名詞句内の修飾成分として現れ、所有者などの人称を示す。
[2] 動詞を主要部とする述部内に現れ、動詞の表す状況の関与者を示す。
人称、数、スタイルによっては、現れる環境によって表 1 に示した形とは異なる形が用いられる場合がある。[1]の環境において現れる形については次項 2.3 で、[2]の環境において現れる形については 6.2.2 および 6.8 で述べる。

れていない場合もある。以下の部分では、*nènè* を 2・3 人称複数人称詞(2-3.PL)と呼ぶ。

3 人称人称詞*nya*は文脈指示に用いられる。単複の区別がなく、既に言及された対象であれば、人を表す場合も、「もの」を表す場合もある。また、先行する文、またはその一部の内容を指す場合もある[4]。*nya*の機能には第 7 章で扱う指示詞の名詞化した形*dèan*/*dèta*などの機能と重なる部分がある。（*nya*と指示詞の名詞化した形の使い分けについては現在のところ十分な調査を行っていない。）また、もう一つの 3 人称の要素として名詞*diri*＋指示詞という形（*diri=nan* ‘that person’, *diri=ta* ‘this person’など）がある。この形は常に人を指示し、指示対象への敬意を示すために用いられる。（*diri*は本来は再帰的な意味（「自身」）を表す名詞である。）

スタイル

1 人称と 2 人称の単数においては, 普通体, 敬体, 最敬体の三つのスタイルが区別される。スタイルの使い分けは以下のとおりである。

日常生活で一般的に用いられるのは普通体と敬体の二つである。普通体は, 自分より目下あるいは自分と同等の人間に話し掛ける際に, 敬体は自分より目上の人間に話し掛ける際に用いられる。ここでいう目上, 目下は、原則として、自分より年齢が上か下かで決まっている。ただし、その原則以外に次のような規範が存在する。

[A] たとえ年下の相手であっても, 叔父や自分の親のいとこなど, 親戚関係の系図において自分より上に位置する者は目上として扱わなければならない。また, 妻は夫を目上として扱わなければならない。

[B] たとえ年下の相手であっても, 未婚者は既婚者を目上として扱わなければならない。

最敬体は, かつて存在した貴族社会で用いられていた形である。聞き手が王(*raja*)やその家臣(*datu*)である場合には, 話し手は自分を *kajuén* と呼び, 相手を *kelépé* あるいは *kelépé-kaji* と呼ぶ習慣があったと言われる。現在のスンバワにも、貴族社会における称号 *Dèa* や *Lalu* などを持つ貴族の末裔が存在し、特定の地域ではそのような相手に対しては、最敬体が用いられることがある。（スンバワ全体における地域の厳密な特定はできていないが、筆者の調査地のうち、Empang では使用が確認されており、Sumbawa Besar では使用が行われていないようである。）

4　このことを検証するためには広く自発的な発話を見る必要がある。ここでは、添付論文中の「ラル・クレクレの話（LK）」中の該当箇所を示す。
・人を指す例：(014), (015), (030), (033)など多数
・人以外を指す例：(202), (203)
・先行する文またはその一部の内容を指す例(004), (036)
テキストにある例を見る限り、指示対象が人間である場合とそれ以外の場合には、用いられ方に違いが見られる。指示対象が人間である場合は、同一指示の名詞句が *nya* の現れている箇所の直前にあるとは限らないが、指示対象が人間以外（先行する文またはその一部である場合も含む）は、指示対象を表す要素は常に *nya* の現れている箇所の直前に現れる。これが厳密な規則なのか、単なる傾向なのかは現在のところわからない。

日常的に最敬体が用いられることのない地域においても、話者の多くがこれらの語の用法を知識として持っており, 伝説などを語る際には登場人物の会話中にこの形を用いることがある。以下の発話は貴族が登場人物である物語「白い血の侯」からの引用である。ここでは、主人公である白い血の侯が、自分より身分が上である王へ向けて最敬体を用いている。

(7)

lók	*tanda*	*kajulén=setia*	*ké'*	*kelépé-kaji*
that	show	1SG.NOBLE=loyal	with	2SG.NOBLE

tó'	*kajulén=roa*	***kajulén=maté***
now	1SG.NOBLE=want	1SG.NOBLE=die

asal	***kelépé-kaji***	*sendiri*	*dè=tèmak=**kajulén***	*dè=goco=**kajulén**,*
only.if	2SG.NOBLE	alone	NOM=shoot=1SG.NOBLE	NOM=stab=1SG.NOBLE

ké'	*kerés*	***kelépé-kaji***
with	sword	2SG.NOBLE

「（これは）**私があなたに**忠実だったということを示しているのです。今、**私は**死にたいと思います、**あなたさま**ご自身が**私を**撃つか**あなたさま**の剣で**私を**刺すかしてくだされば。」**[DPG 047]**

2.1.2　指示詞（名詞相当の機能を持つもの）

指示詞に名詞節形成詞がついた形は名詞相当の機能を持ち、名詞句の主要部として機能する。（この形については第４章 2.5.2 で扱った。）

それぞれの形と機能の概略は以下のとおりである。

dèta「これ」基準点（通常は発話者）の近くにあるものを指示する。
dèna「あれ」基準点（通常は発話者）から遠くにあるものを指示する。
dètó'「それ」発話時点に発話場面にあるものを指示する。
dèan「それ」場面指示においては基準点（通常は発話者）から中程度の距離にあるものを指示詞、それ以外の場合においては言語内、言語外の情報から特定が可能なものを指示する。
dèmé「どれ」それを含む複数の対象の範囲は特定されているが、そのうちのどれであるか話者に特定されていない対象を指示する。

個々の指示詞の意味については第９章で詳しく述べる。

2.1.3　数量詞

名詞句が数や量を表す要素（以下数量詞とよぶ）を含む場合、数量詞は名詞句の主要部として現れる場合と、修飾成分として現れる場合がある。

これは名詞句全体の指示物が「定」であるかどうか（先行する発話などから聞き手がその指示物を特定可能だと話者が考えているかどうか）によって決まる。名詞句全体の指示物が定である場合は、数量詞は修飾成分として現れ、不定である場合は数量詞が名詞句の主要部と

して現れる。

以下の例は、日本語の「私は七人の娘を見た、その七人の娘は皆姉妹だった。」という文に相当するスンバワ語の文を話者が作例したものである。

「七人の娘」を表す名詞句は、その指示物について最初に言及する際には数量詞を主要部とする形で現れ、二回目の言及においては数量詞を修飾成分とする形で現れている。

(8)　*ku=gita'*　[***pitu'***　*tau=dadara*.]
1SG.LOW.AFFIX=look.at　seven　person=young (of.girls)

[*tau=dadara=**pitu**=nan*]　*sarèa'*　*basanaksoai*.
person=young=seven=that　all　be.sisters

「私は**七人の**娘（lit.娘の七人）を見た。その**七人の**娘はみな姉妹だった。」

2.1.4　名詞節形成詞

名詞節形成詞 *adè*、*lók* は常に単文の前に現れ、その全体を名詞句相当の機能を持つ成分（名詞節）にする。(名詞節形成詞については 8 で扱う。)

以下に名詞節形成詞 *adè* が名詞節を形成している例を示す。（[ ]内の部分が名詞節である。）

(9)　*nya*　[***adè***　*ku=gita'*　*pang'*　*amat=nan*］.
3　[NOM　1SG.LOW.AFFIX=look.at　at　market=that].
「彼が私がそのマーケットで見た（人）です。」

2.2　人名を表す固有名詞を含む名詞句

名詞句が固有の人物を表す場合、名詞句は次の構造を持つ。

[カテゴリーを表す要素] [固有名詞] （修飾成分）

この場合､固有名詞とその指示対象の何らかのカテゴリーを表す要素の両方が常に名詞句中に現れる。本人に直接呼びかける場合をのぞいて、人名を現す固有名詞が単独で文中に現れることはない。

カテゴリーを表す要素には以下のものがある。

・性別を表す小辞（*si*、*nya* の二つ）

si=Siti「シティ（女性の名前）」

nya=Amén「アミン（男性の名前）」

この二つの形の使い分けには話し手の性別と指示対象である人物の性別がかかわっている。話し手が男性である場合は女性に対しては *si* を、男性に対しては *nya* を用いる。一方、話し手が女性である場合は男性に対しても女性に対しても *si* を用いる。

・親族関係、地位や立場を表す名詞

・*endé*「叔父」（この形の縮約形である *né* という形もよく用いられる。）

子供を持つにふさわしい年齢の男性に用いる。（例：*endé=Mak*「マックおじさん」）
・*bapak*[5]「父」（この名詞の縮約形である*pak*という形もよく用いられる。）
子供を持つにふさわしい年齢の男性に用いる。
・*ibu*「母」子供を持つにふさわしい年齢の女性に用いる。
・*papén*「祖父母」（この名詞の縮約形である *pén* という形もよく用いられる。）話し手の祖父母ぐらいの年齢の人に用いる。
・*haji*「メッカへの巡礼をすませた男性」
・*haja*「メッカへの巡礼をすませた女性」
・*datu*「領主、王」
・*dèa* 貴族社会での男性の階級（王侯）
・*lalu* 貴族社会での男性の階級（*dèa* に次ぐ階級）
・*guru*「先生」

これらの要素は、一般の名詞が物語の登場人物やクラスの中の先生などある特定の場における固有の指示対象を指す場合にも用いられる。（例：*endè=kakura*（おじさん＋亀）、「（物語の登場人物の）亀さん」, *pak=guru*（お父さん＋先生）「先生」）

第 2 章 2.3.1 で述べたように、固有名詞は常に先行する要素と一つの強勢の単位を形成する。この場合も同様で、カテゴリーを表す名詞は後続する人名と強勢の単位を形成する。そのため、人名を表す固有名詞を含む名詞句においては、意味の面では固有名詞が主であるにもかかわらず、形式の面ではカテゴリーを表す要素が主要部、名前を表す名詞が修飾成分であると解釈できる。

2.3　名詞句の修飾成分

名詞句内で修飾成分として現れるのは名詞句, 人称を表す要素, 指示詞, 数量詞, 副詞句, 前置詞句、動詞、および、名詞節である。
以下の部分では修飾成分の種類ごとに例を示す。

2.3.1　名詞句が修飾成分である場合

名詞句が名詞を修飾する場合, その意味的関係にはおおまかにいって, 次のようなものがある。

(i) 後続する名詞句が，先行する名詞の指示物の持ち主を表す。

balé	*guru*	
house	teacher	「先生の家」

5　この*bapak*と次の*ibu*はそれぞれインドネシア語の父、母に相当する語で、インドネシア語でも目上の人の名前に付けて敬意を表すのに用いられる。スンバワ語のこの種の表現はインドネシア語からの借用であると思われる。

(ii) 先行する名詞が後続する名詞句の指示物の一部を表す。

lampak　*nè*
ひら　足　「足の裏側、足のひら」

(iii) 後続する名詞句が先行する名詞の指示物の内容、テーマを表す。

buku　*sejara=Samawa'*
book　history=Sumbawa「スンバワの歴史についての本」

(iv) 後続する名詞句が先行する名詞の指示物の種類を表す。

empa'　*kebó*
肉　水牛　「水牛の肉」

bua'　*nangka*
fruits　jackfruits　「ナンカ（果物の一種）の実」

(v) 後続する名詞句が先行する名詞の指示物の材料を表す。

balé　*batu*
house　stone　「石の家」

第 2 章 3.1 で述べたように、名詞が名詞を修飾する場合は、それぞれの名詞はそれぞれに固有の強勢を保ったままで発音される。ただし、修飾成分が固有名詞である場合は、主名詞と後続する名詞は一つの強勢の単位を形成する。

（例）*brang=Pria.*
river=Pria　「プリア川」
gunóng=Setia
mountain=Setia　「スティア山」
tau=Samawa'
person=Sumbawa　「スンバワ人」

2.3.2　人称を表す要素が修飾成分である場合

2.3.2.1　形

人称を表す要素のうち、名詞句内の修飾成分として現れるものを表 5-2 に示す。この位置には固有の強勢を持つもの（人称詞）、固有の強勢を持たないもの（人称辞）の両方が現れうる。

表 5-2 名詞句内の修飾成分として現れる人称詞／人称辞の形

<table>
<tr><td></td><td colspan="3">単数</td><td rowspan="2">複数</td></tr>
<tr><td></td><td>普通体</td><td>敬体</td><td>最敬体</td></tr>
<tr><td>1</td><td>kaku
ku</td><td>kaji</td><td>kajulén</td><td>kita（包括形）
kami（排除形）
tu（包括形、排除形の区別なし）</td></tr>
<tr><td>2</td><td>kau
mu</td><td>sia</td><td>kelépé または
kelépé-kaji</td><td rowspan="3">nènè
(場面指示)</td></tr>
<tr><td rowspan="2">3</td><td colspan="3">nya（文脈指示）
（dèta/ dèan など（文脈指示、場面指示））</td></tr>
<tr><td colspan="2">diri「自身」＋指示詞
(diri=nan「その(nan)お方」など）</td></tr>
</table>

ほとんどの場合、表 5-1 で示した人称詞が現れる。ただし、1 人称単数普通体においては人称詞 *aku* は現れず、*kaku* という形が現れる。*kaku* はこの位置に（名詞句内の修飾成分として）のみ現れる形である。以下の部分ではこの形を属格人称詞と呼ぶことにする。

上で触れたように、人称詞と人称辞（固有の強勢を持つ形と持たない形）の対立があるカテゴリーでは、人称辞も現れうる。

第 2 章 3.1 で述べたように、この言語では、修飾成分が動詞、副詞、指示詞、数量詞、固有名詞である場合は主名詞と一つの強勢の単位を形成し、修飾成分が普通名詞である場合は、主名詞と別々の強勢の単位を形成する。(10)に修飾成分が動詞である例を、(11)に指示詞である例を、(12)に名詞である例をそれぞれ挙げる。

(10)　*anak=balong*
child=good　　「よい子」

(11)　*anak=ta*
child=this　　「この子」

(12)　*anak*　*pió*
child　bird　　「鳥の子」

表 5-2 に示した人称を表す要素のうち、固有の強勢を持つもの（人称詞、属格人称詞）は、その人称によって、動詞、指示詞、固有名詞と同様の音声的ふるまいをするものと、普通名詞と同様の音声的ふるまいをするものに分けられる。

1 人称人称詞、（つまり、単数敬体 *kaji,* 単数最敬体 *kajulén*、複数包括形 *kita,* 排除形 *kami*）および、1 人称普通体属格人称詞 *kaku* は、先行する名詞と一緒に強勢の単位を形成する。（この点では、動詞、副詞、指示詞などと同様のふるまいをするといえる。）

(13)　*anak=**kaku***
child=1SG.LOW.GEN　　「私の子」

(14)　*anak*=***kita***
child=1PL.INCL　「(聞き手を含む)私たちの子」

その他の人称詞、つまり、2 人称単数敬体 *sia*, 2 人称単数最敬体 *kelépé*、2 人称・3 人称複数 *nènè* 等は、被修飾名詞と別々の強勢の単位を形成する。（一般の名詞と同様のふるまいをする。）

(15)　*anak*　***sia***
child　2SG.HIGH　「あなた（敬体）の子」

(16)　*anak*　***kelépé***
child　2SG.NOB「あなたさま（最敬体）の子」

(17)　*anak*　***nènè***
child　2-3.PL　「あなたたちの子、あの人たちの子」

2.3.2.2　人称を表す修飾成分が義務的に現れる場合

血縁関係や身体部位を表す名詞が主要部で、その指示物の「関係者」や「所有者」が話し手または聞き手である場合は、その人称に相当する人称詞／人称辞が義務的に名詞句内に現れる。（この種の人称詞／人称辞は対応する日本語で訳出すると容認されない文、もしくは不自然な文になることが多い。ここでの日本語訳では、この種の人称を表す要素はかっこ内に入れて示す。）

(18)　*aku*　*ada'*　*kaka'*　***ku***　*pang'*　*Samawa'*.
1SG.LOW　exist　elder sibling　1SG.LOW.AFFIX　at　Sumbawa
「私にはスンバワに（私の）兄（または姉）がいる。」

(19)　**aku*　*ada'*　*kaka'*　*pang'*　*Samawa'*.
1SG.LOW　exist　elder sibling　at　Sumbawa
（期待される意味）「私にはスンバワに兄（または姉）がいる。」

(20)　*aku*　*sakét*　*nè*　***ku***.
1SG.LOW　hurt　foot　1SG.LOW.AFFIX
「私は（私の）足が痛い。」

(21)　**aku*　*sakét*　*nè*
1SG.LOW　hurt　foot　（期待される意味）「私は足が痛い。」

この環境における 3 人称の要素の使用は、随意的である。(22)における *nè*「足」の所有者を表す人称詞 *nya* '3'は現れても現れなくてもよい。

(22)　*tau=nan*　*sakét*　*nè*　(*nya*).
person=that　hurt　foot　(3)

「その人は（その人の）足が痛い。」

2.3.2.3　修飾成分として複数の候補がある場合

2.3.2.1 の表 5-2 に示したように、1 人称普通体単数、２人称普通体単数、1 人称複数のカテゴリーにおいては､それぞれ修飾成分として人称辞が現れる場合と人称詞または属格人称詞が現れる場合の両方がある。このような複数の選択肢がある場合を以下にまとめて示す。

普通体 1 人称単数：人称辞 *ku*、属格人称詞 *kaku*
普通体 1 人称複数：人称辞 *tu*、人称詞 *kita, kami*
普通体 2 人称単数：人称辞 *mu*、人称詞 *kau*

以下に、名詞 *balé*「家」をそれぞれの要素が修飾する例を一覧にして示す。

	人称辞による修飾	属格人称詞または人称詞による修飾
普通体 1 人称単数	*balé ku*「私の家」	*balé=kaku*「私の家」
普通体 1 人称複数	*balé tu*「私たちの家」	*balé=kita*「私たち（私とあなた）の家」 *balé=kami*「私たち(私と第三者)の家」
普通体２人称複数	*balé mu*「あなたの家」	*balé kau*「あなたの家」

このような場合、二つの形の使い分けについては以下のことが観察されている。（以下の記述では属格人称詞または人称詞をまとめて「人称詞」と呼ぶ。）

[1] 所有者の人称が文脈から自明である場合は、常に人称辞が現れる。

[2] [1]以外の場合は人称詞、人称辞の両方が用いられうるが、人称を表す要素が談話の焦点である場合は人称詞が用いられる傾向がある。

[1] 所有者の人称が文脈から自明である場合

この場合は常に人称辞が用いられる。

例として、人間関係や身体名称を表す名詞が被修飾成分である場合を挙げる。本章 2.3.2.2 で述べたように、この言語ではそのような名詞の指示物の関係者、所有者が話し手、聞き手である場合、その人称を表す要素が義務的に名詞句内に現れる。このような場合、当該の名詞の指示物の所有者が誰であるかは先行する談話の内容から予測可能であることが多い。たとえば、日本語の「私は足が痛い」「私は頭が痛い」に相当する内容を述べる場合、「足」「頭」の所有者が誰であるかは自明である。このような場合には常に人称辞が現れる。

(23)　*aku*　*sakét*　*nè*　***ku***.
　　1SG.LOW　hurt　foot　1SG.LOW.AFFIX
　　「私は（私の）足が痛い。」

(24)　*kau*　*nó.soka*　*sakét*　*ótak*　***mu***　*ké'*?
　　2SG.LOW　NEG　hurt　head　2SG.LOW.AFFIX　INTERR
　　「あなたは（あなたの）頭が痛くありませんか？」

(25) *aku* *peno'* *keluarga* ***ku*** *pang'* *Empang.*
1SG.LOW many family 1SG.LOW.AFFIX at Empang
「私はウンパンにたくさんの（私の）親戚がいる。」

(26)-(28)は、上の例文に対応する例で、ここでは所有者を表すのに人称詞が用いられている。このような文は話者に容認されにくい。

(26) ?***aku*** *sakét* *nè=**kaku.***
1SG.LOW hurt foot=1SG.GEN
「私は（私の）足が痛い。」

(27) ?***kau*** *nó.soka* *sakét* *ótak* ***kau*** *ké'*?
2SG.LOW NEG hurt head 2SG.LOW INTERR
「あなたは（あなたの）頭がいたくありませんか？」

(28) ?*aku* *peno'* *keluarga=**kaku*** *pang'* *Empang.*
1SG.LOW many family=1SG.GEN at Empang
「ウンパンにたくさんの親戚がいる。」

以下に会話からの例を挙げる。これは祖母と孫の会話の一部である。ここでは、孫の求めに応じて、祖母が自分の兄弟姉妹を順に数え上げている。言及されているのは祖母にとっての自分の兄弟姉妹であるため、それが聞き手である孫にとっての祖父母相当の人物であることは自明であるが、その関係を指す語*pén*[6]（祖父母）は常に関係者を示す人称辞と共起している。（「お前(聞き手)のおじいさん、おばあさん」という形で示されている。）

(29) *Ambok,* *Cambok,* *nan* *dè=paléng* *rèa'* *dèan,*
Ambok Cambok that NOM=the.most big that

lakó' *pén* *Widah* ***mu*** *m=Bonto=ana,*
to grand.parent Widah 2SG.LOW.AFFIX at=Bonto=over there

lakó' aku *lakó'* *Baco,* *lakó'* *Resat,* *lakó' pén=Mina* ***mu***
to 1SG.LOW to Baco to Resat to grand.parent=Mina 2SG.LOW.AFFIX

Rahma *nya* *adè* *ódé'* *na.*
Rahma 3 NOM small you.see
「アンボック、チャンボック、彼が一番年上だった。それから、（**おまえの**）ウィダおじいさん、ボント（地名）のね、それから私、それからバチョ、それからルサット、それから（**お前の**）ミナおばあさん。ラフマ、彼女が一番年下だ。」

6　*pén*は*papén*「祖父母」に由来する名詞で、実際の祖父母（当人の両親の両親）だけでなく、それと親族関係の系図において同じ代に属する人（つまり、祖父母の兄弟姉妹あるいはその配偶者）も指す。

以上のことから、人称詞は人称を表す要素が自明である場合など、明らかに談話の焦点でない場合は用いられることがないといえる。このような場合は人称辞が義務的に用いられる。

[2] **所有者の人称が文脈から自明であるとはいえない場合**

この場合は、人称詞、人称辞の両方が用いられうる。ただし、自然な発話においては人称を表す要素に談話の焦点がある場合は、人称詞が現れる傾向がある。

例えば、人称を表す要素が「対照」の焦点である場合は人称詞が現れるのが普通である。次の例文は、「私は私の弟を呼んだが、私の弟ではなくアミンの弟が来た」という日本語に相当する文を話者がスンバワ語に訳した文である。

(30) *ku=kelèk*　***adi'***　***ku***,
1SG.LOW=call　brother　1SG.LOW

tapi　*dè=datang*　*adi'*　*nya=Amén*　*siong'*　*si*　***adi=kaku***.
but　NOM=come　brother　title=Amin　NEG　MM　brother=1SG.GEN

(30)の中には「私の弟」に相当する名詞句が二回現れている。所有者である話し手（「私」に相当する要素は、一つ目の名詞句においては人称辞で現れ、二つ目の名詞句においては人称詞で現れている。これは、二つ目の人称詞においては「私」に相当する情報が対照の焦点になっているからだと考えられる。

同様に、人称を表す要素が「疑問」の焦点である発話、およびそれに対する答えとしての発話においても属格人称詞または人称詞が用いられる。(31)は、「これはあなたの家ですか」「私の家です」という日本語に相当する文を話者がスンバワ語に訳したものである。

(31) A: ***balé***　***kau***　*ké'*　*dèta*?
house　2SG.LOW　INTERR　this

B: ***balé=kaku***　*si*.
house=1SG.GEN　MM

(32)は会話からの例である。これも人称を表す要素が「疑問」の焦点である疑問文とその答としての発話で、答えにおいて、人称詞が用いられている。
（これは、孫と祖母の会話で、祖母がかつて養子に出した子どもが話題となっている。）

(32)(a) *dè=pang'*　*Jotang*　*anak*　*sia?*
NOM=at　Jotang　child　2SG.HIGH
「(Edot) ジョタンの人は、おばあちゃんの息子？」

(b) *anak=**kaku***　*dèan*,　*Haji=Ahéd*　*né*,　*anak=**kaku***　*dèan*.
child=1GEN　that　Hajji=Ahid　you.know　child=1GEN　that

mula-mula　*né*,　*èa'*　*léng*　*sepan*　*ku*.
beginning　you.know　aunt　word　call　1SG.LOW.AFFIX
「あれは**私の**子どもだよ。ハジ・アヒッドね、あれは**私の**子どもだよ。最初はね私を「おばさん」と呼んでいたんだよ。」[PA087-088]

また、当該の伝達の重点が所有者の人称を特定することである場合（所有者の人称がいわゆる「確言」の焦点であるような場合）も、属格人称詞や人称詞が用いられるようである。

(33)はそのような例の一つである。これは、「クレクレの物語」からの引用である。これは、かつて地上で暮らしていた天女が、天界に戻った後、追いかけて来た夫が侍女に託した指輪を偶然見つけ、「これは私の指輪だ」と叫ぶ場面である。ここでは、指輪の所有者を現す要素が属格人称詞の形で現れている。

(33) *wé,* *ba'* *gita-gita'* *mo* *sisén,* *mé* *dèta* *né,*
oh so look-look MM ring which this you.know

kuda', *sisén=**kaku*** *dèta* *léng.*
why ring=1GEN this word
「(天女は)指輪を見て、「わぁ、これはどこにあったの？なぜ？これは**私の**指輪よ」と言った。」[LK167-168]

このように、人称をあらわす要素が談話の焦点である場合は、人称詞が用いられる傾向が観察される。（実際の発話をみると、ほとんど常に属格人称詞または人称詞が用いられている。）

ただし、このような場合に必ず人称詞が用いられるとは限らない。聞き取り調査を行ったところ、上に示した例文(30)-(33)に関して、人称詞は常に人称辞と交代可能であるとのことであった。（それぞれ別の形に入れ換えた例文が話者に許容された。）

以上のことから、人称詞と人称辞の現れ方についてまとめると、次のことがいえる。人称詞はその表す内容に焦点がある場合に用いられる傾向が強く、その表す内容が焦点ではない場合は決して用いられることがない。また、人称辞はその表す内容に焦点がある場合もない場合も用いられうる。

2.3.3　指示詞が修飾成分である場合

修飾成分として現れる指示詞には次の四種類がある。

ta「これ」基準点（通常は発話者）の近くにあるものを指示する。

ana「あれ」基準点から遠くにあるものを指示する。

tó'「それ」発話時点において発話場面にあるものを指示する。

nan「それ」場面指示においては基準点から中程度の距離にあるものを指示詞、それ以外の場合においては言語内、言語外の情報から特定が可能なものを指示する。

mé「どれ」それを含む複数の対象の範囲は特定されているが、そのうちのどれであるか話者に特定されていない対象を指示する。

（個々の指示詞の意味については第９章で詳しく述べる。）

指示詞は通常は名詞句の最後に現れる。指示詞は直前の要素と強勢の単位を形成する。

(34) *tau=ta*
person=this 「この人」

(35)　*salaki=rango=**ta***
husband=big=this　　「この大きい夫」

(36)　*salaki=kaku=**ta***
husband=1sg.gen=this　「この私の夫」

(37)　*salaki=kaku*　*dè=gera=**ta***
husband=1sg.gen　nom=handsome=this「この私のハンサムな夫」

2.3.4　数量詞が修飾成分である場合

2.1.3 で述べたように、数量詞を含む名詞句（たとえば、「七人の人」という意味を表す名詞句）においては、名詞が主要部である場合と、数量詞が主要部である場合がある。(38)(=(8))の 2 行目に現れているように、名詞句の指示物が既に談話に導入されている場合は前者の形が用いられ、数量詞は修飾成分として現れる。この場合、数量詞は被修飾成分と強勢の単位を形成する。

(38)(=(8)) *ku=gita'*　[***pitu'***　*tau=dadara*.]
1SG.LOW.AFFIX=look.at　seven　person=young.(of.girls)

[*tau=dadara=**pitu**=nan*]　*sarèa'*　*basanaksoai*.
person=young=seven=that　all　be.sisters
「私は**七人の**娘（lit.娘の七人）を見た。その**七人の**娘はみな姉妹だった。」

2.3.5　副詞句が修飾成分である場合

以下に例を示す。この場合、副詞と被修飾成分は強勢の単位を形成する。

(39)　*pipés=**sapèrap***
money=yesterday　　「昨日のお金」

(40)　*tau=**jarang***
person=rarely　「珍しい（滅多にいない）人」

2.3.6　前置詞句が修飾成分である場合

前置詞句は、含まれる前置詞によって、修飾成分となりうるものとなりえないものがある。修飾成分になりうる前置詞句を構成するものには、以下の 6 つがある。

鼻音前置詞 *N*（場所「～で」）、*pang'*（場所「～で」）、*kalés*（起点「～から」）、*kaléng*（起点「～から」）、*umén*（「～のため」）、*antara*（「～の間に」）

(41)　*tau*　***m=balé***
person　at=house　　「（通常は妻または夫を指して）家にいる人」

(42)　*balé*　***pang'***　***Samawa'***
house　at　Sumbawa　　「スンバワにある家」

(43)　*tau*　***kalés***　***Samawa'***
person　from　Sumbawa　「スンバワ出身の人」

(44)　*tau*　***kaléng***　***Samawa'***
person　from　Sumbawa　「スンバワ出身の人」

(45)　*lamong'*　***umén***　***kaka'***
clothes　for　elder.sibling　「兄（姉）のための服」

(46)　*tau*　***antara***　***kaji***　***ké'***　***sia***
person　between　1SG.HIGH　and　2SG.HIGH
「私とあなたの間にいる人」

以下の前置詞を含む前置詞句は修飾成分としては用いられない。
lakó' / kó'（方向「～へ」）、*ké'*（随伴者、道具「～で、～と」）
sampai (着点、「～まで」)、*léng*（他動詞分の動作主「～が、～によって」）
以下のような例は容認されない。

(47)　**tau*　***lakó'***　***Samawa'***
person　to　Sumbawa
（期待される意味）「スンバワへの（スンバワへ行く）人」

(48)　**tau*　***ké'***　***tau=Jepang***.
person　with　person=Japan.
(期待される意味)「日本人との（日本人といる）人」

(49)　**bés*　*sampai*　*Bima*.
bus　to　Bima　(期待される意味)「ビマへのバス」

(50)　**pameli*　***léng***　***nya***.
what.is.bought　by　3
(期待される意味)「彼が買ったもの」

このことから、主要部の名詞の指示物の静的な属性を表す前置詞句は修飾成分となるが、一時的で動的な状況を表すような前置詞句は修飾成分とならない傾向があるといえる。

kalés（起点「～から」）、*kaléng*（起点「～から」）を含む前置詞句が修飾成分となる場合、修飾成分は名詞の指示物の恒久的な属性である出身地を表す。一時的な運動の起点を表すことはない。たとえば、(43)(44)は「(今日)スンバワから来た人」という意味は表さない。

2.3.7　動詞が修飾成分である場合

単独の動詞、または完了を表すアスペクト辞 *ka* が付接した形が修飾成分となりうる。この場合、動詞は被修飾成分と強勢の単位を形成する。

(例)　*tau=**balong***「よい(*balong*)人」，*tau=**ka=maté***「死んだ (*ka=maté*)人」

動詞が修飾成分として現れるのは、その表す内容が静的な状況を表す場合である。

2.3.8　名詞節が修飾成分である場合

名詞節には名詞節形成詞 *adè* に導かれるものと、名詞節形成詞 *lók* に導かれるものがある。以下に例を示す。名詞節形成詞の機能についてはこの章の 8 で述べる。また、名詞節が修飾成分である場合については第 8 章 2.4 で述べる。

(51)　*tau* ***adè*** ***inóm=kawa***.
person NOM drink=coffee　「コーヒーを飲む人」

(52)　*rungan* ***lók*** ***nya*** ***datang***.
news NOM 3 come　「彼が来るという知らせ」

2.4　名詞句の並列

二つ以上の名詞句が接続詞 *ké'*「～と」または *ato*「または」を間において並べられ、一つの名詞句として機能する場合がある。（*ké'*「～と」は道具や随伴者を表す前置詞 *ké'*と同形である。）

以下に例を示す。（名詞句を[ ]に入れて示した。）

(53)　*ku=beli* [***tè*** ***ké'*** ***kawa***].
1SG.LOW.AFFIX=buy banana and coffee
「私はお茶とコーヒーを買う。

(54)　*ku=inóm* [***kawa*** ***ato*** ***tè***].
1SG.LOW=drink coffee or tea
「私はコーヒーかお茶を飲む。」

3　副詞句

副詞句の主要部に現れる要素は、副詞、数量詞、指示詞である。

このうち「とき」を表す副詞以外、つまり、様態などを表す副詞、数量詞、指示詞は常に単独で副詞句を構成する。

(55)　***mbang-mbang***　*nya*　*datang*　*kóta'*
suddenly　3　come　to.here
「突然彼はここに来た。」

(56)　***telu***　*nya*　*kakan=tepóng*.
three　3　eat=cake
「彼は三つお菓子を食べた。」

(57)　***ta***　*ya=ku=mólé'*　*kó'*　*dèsa*.
this　CONS=1SG.LOW.AFFIX=go.home　to　village
「このように（今）、私は故郷に帰るつもりです。」

「とき」を表す副詞は、単独で現れる場合もあれば、修飾成分とともに現れる場合もある。単独で「とき」を表す副詞には以下のものがある。

beru'「つい先ほど」（発話時点の直前）
tonè「先ほど」(発話時点の一定時間前)
dunóng'「以前」(発話時点のかなり前)
endi「将来，後で」(発話時点の後)
nawar「明日」(発話時点を含む日の翌日)
puan「あさって」(発話時点を含む日の翌々日)
puan=telin'「しあさって」(発話時点を含む日の三日後)
patan'「四日後」
sapèrap「昨日」(前日)
puan=anó「おととい」(二日前)
telén=anó「さきおととい」(三日前)
patan=anó「四日前」
sapuan「ずっと前」（相当期間前）

また、指示詞 *tó'*は、単独で発話時点（「今」）を表す。（指示詞 *tó'*の意味については第 8 章で詳しく述べる。）

時の単位を表す語は、修飾成分とともに副詞句を形成する。この場合修飾成分として現れるのは、指示詞、動詞、名詞節である。

*jemat=**ta***「この週」（修飾成分が指示詞）
*bulan=**nan***「その月」（修飾成分が指示詞）
*anó=**panas***「暑い日」（修飾成分が動詞）
tén ***dè=ka=laló***「過ぎ去った年」（修飾成分が名詞節）

本稿で副詞として扱うカテゴリーは、さまざまな意味的、統語的機能を持つ要素を含む。

この点については 7 で述べる。

4　前置詞句

前置詞句は前置詞＋名詞句という形を持つ。前置詞には以下のものがある。

・*pang’* / 鼻音前置詞 *N*　場所「～で、～に」
・*lakó’ / kó’*　方向「～へ、～に」
・*kalés/ kaléng*　起点「～から」
・*ké’* ‘with’ 随伴者「～と」、道具「～で」
・*umén*　受・授益　「～のために」
・*antara*　範囲「～から～まで」「～の間で、～の間に」
・*sampai*　限度「～まで」
・*léng*　他動詞文の動作主「～によって、～が」

場所を現す前置詞には *pang’*と鼻音前置詞の二種類が、方向を示す前置詞には *lakó’*と *kó’* の二種類が、起点を示す指示詞には、*kalés* と *kaléng* の二種類があるが、それぞれの間に顕著な意味の違いは確認されていない。

前置詞句は次の機能を持つ。（それぞれこの章の該当箇所を参照されたい。）
[1] 述部と共起し、補語または副詞成分として機能する (6.3, 7)
[2] 述部の主要部となる (5.3)
[3] 名詞句内の修飾成分となる (2.3.6)

前置詞句の統語的機能は含まれる前置詞によって異なる。
1 で触れたように、場所を表す前置詞句 *pang’/ N* は、[1]にかかわるふるまいの点で副詞句に近い性質を持つ。具体的には、これらの前置詞句は、ほとんどの副詞句と同様、述部の主要部の語類が何であってもその述部と共起する。その他の前置詞を含むものは動詞を主要部とする述部とのみ共起し、名詞句、副詞句、前置詞句を述部の主要部とする文には現れない。このことを根拠に、本記述では、場所を表す前置詞句を副詞成分、それ以外の前置詞句を補語として扱う。
[2][3]の機能を持つのは、以下の前置詞を含む前置詞句である。
鼻音前置詞 *N*（場所「～で」）、*pang’*（場所「～で」）、*kalés*（起点「～から」）、*kaléng*（起点「～から」）、*umén*（「～のため」）、*antara*（「～の間に」）
この機能を持つのは、静的な状況を表す前置詞句であるといえそうである。）

5　動詞以外が述部の主要部である文

2-4 では文の構成要素の構造について述べた。5 および 6 では文の構造について述べる。まず、この節で名詞句、副詞句、前置詞句を述部の主要部とする文について述べる。

この場合、述部の構造は以下のようになる。

（否定詞）主要部[名詞句、副詞句、前置詞句]（限定詞）（叙法辞）

述部に必須の要素は主要部だけで、その他の要素は随意的に現れる。ここでは述部が主要部のみからなる例を中心に扱う。

5.1　名詞句が述部の主要部である文

上で述べたように、この場合、述部と共起するのは名詞句補語一つと副詞成分である。

(58)(59)は名詞句補語が共起している例である。スンバワ語には，いわゆる「コピュラ」に相当する要素は存在せず二つの名詞句を並置することによって文が成立する。

(58)　***tau=Empang***　*dèan*
　　person=Empang　that　「彼は Empang の人だ。」

(59)　*dèan*　***tau=Empang***
　　that　person=Empang　「彼は Empang の人だ。」

この種の文は、多くの場合、一方の名詞句が言語的にまたは言語外的に既に談話に導入されているもの（主題）を指し、もう一方の名詞句がその属性を表す。どちらの名詞句が主題を表し、どちらの名詞句が属性を表すかは、主題を表す要素が上昇イントネーションを伴って発話されることによって明示される[7]。(58)のように属性を表す要素が前に現れる場合は、その要素が平板なイントネーションを伴って発話され、主題を表す要素は上昇調のイントネーションで発話される。(59)のように主題を表す要素が前に現れる場合は、その要素が上昇イントネーションを伴って発話され、属性を表す要素は平板なイントネーションを伴って発話される。

(58)(59)のイントネーションを(58)’(59)’に矢印の形で大まかに示した。

(58)’　***tau=Empang*** →　*dèan* ↗
　　person=Empang　that　「彼は Empang の人だ。」
　　述部　**補語**

(59)’　*dèan* ↗　***tau=Empang*** →
　　that　person=Empang　「彼は Empang の人だ。」
　　補語　**述部**

---

7 別の言い方をすれば、この種の文では、成分の相対的語順は意味の決定には関係がなく、意味はイントネーションによって決まると言える。

このような述部と名詞句補語のイントネーションの特徴は、副詞句が述部の主要部の場合(5.2)も、前置詞句が述部の主要部の場合(5.3)も同様にみられる。

5.2　副詞句が述部の主要部である文

述部を構成するのは、主にときを表す副詞である。様態を表す副詞のうち述部を構成するのは、*mèsa-mèsa'*「一人で」、*tomas-tomas*「やかましく」などいくつかに限られる。この項5の冒頭で述べたように、述部と共起するのは名詞句補語一つと副詞成分である。
(60)(61)は述部に名詞句補語が共起している例である。

(60)　*pèsta=nan*　　***anó-Senén***.
festival=that　　Monday
「お祭りは月曜日だ。」

(61)　***mèsa-mèsa'***　*tau=nan*.
alone　　person=that
「その人はひとりぼっちだ。」

この場合、述部と名詞句補語の語順には制約がない。(62)(63)のような語順も容認される。

(62)　***anó-Senén***　　*pèsta=nan*.
Monday　　festival=that
「お祭りは月曜日だ。」

(63)　*tau=nan*　　***mèsa-mèsa'***　　.
person=that　alone
「その人はひとりぼっちだ。」

5.3　前置詞句が述部の主要部である文

第1節で述べたように、前置詞句のうち、以下のものを含む句が述部として現れうる。

鼻音前置詞 *N-*（場所「～で」）、*pang'*（場所「～で」）、*kalés*（起点「～から」）、*kaléng*（起点「～から」）、*umén*（「～のため」）、*antara*（「～の間に」）

この項（第5節）の冒頭で述べたように、述部は名詞句補語一つと副詞成分が共起しうるが、名詞句補語のみが共起している例を挙げる。

(64)　*aku*　　***m=balé***
1SG.LOW　at=house　　「私は家にいる。」

(65)　*aku*　　***pang'***　　***balé***
1SG.LOW　at　　house　「私は家にいる。」

(66) *aku* ***kalés*** ***Samawa'.***
1SG.LOW from Sumbawa 「私はスンバワ出身である。」

(67) *aku* ***kaléng*** ***Samawa'.***
1SG.LOW from Sumbawa 「私はスンバワ出身である。」

(68) *Dadap=nan* ***antara*** ***Muér ké'*** ***Brangkorong.***
Dadap=that between Muir and Brangkorong
「ダダップはムイルとブランコロンの間にある。」

(69) *dèta* ***umén*** ***sia.***
this for 2SG.HIGH
「これはあなたのためのものです。」

このタイプの文において、名詞句補語と述部の語順に特に制約はない。(64)-(69)に対応する文として、それぞれの名詞句補語と述部の語順を入れかえた文も容認される。

次の前置詞を含む前置詞句は述部に現れない。
sampai　限度「～まで」、*léng*　他動詞文の動作主「～によって、～が」、*lakó' / kó'*　方向「～へ、～に」、*kè* 'with' 随伴者「～と」、道具「～で」

前置詞句のうち、静的な状況を表し、名詞句補語の指示物の属性を表しうるものは述部に現れうるが、何らかの移動や運動を前提とする状況を表し、単独で静的な状況を表すことがないものは述部には現れないといえそうである。

6　動詞が述部の主要部である文

6.1　文の成分

動詞が主要部である述部は、名詞句補語、前置詞句補語、副詞成分と共起する。
以下に述部が名詞句補語、前置詞句補語と共起している例を挙げる。
(70)においては *nya*（3 人称代名詞，動作主体）が名詞句補語、*kó' Lapé*「ラペへ」が前置詞句補語である。(71)においては *nangka=nan*「そのジャックフルーツ」が名詞句補語、*léng nya*「彼が（他動的動作の動作主体）」が前置詞句補語である。

(70) *laló* *kó'* *Lapé* *nya.*
go to Lape 3
「彼はラペに行く。」

(71) *ka=kakan'*　*nangka=nan*　*léng*　*nya.*
PERF=eat　jackfruit=that　by　3
「彼はそのナンカの実を食べた。」

補語の形は，その表すものと述部の表す内容との意味的関係，および，述部との相対的語順によって決まる。この点については 6.3 で詳しく述べる。

以下の部分では、まず 6.2 で述部の構造について述べ、6.3-6.8 で述部と共起する要素の現れ方について述べる。

6.2　述部の構造

動詞を主要部とする述部に必須の要素は主要部（用言）だけである。(70)のように，動詞（ここでは *laló*）が単独で述部を構成する文は会話やテキスト中にしばしばみられる。

本稿では、述部の主要部である動詞に加えて、語順が動詞または他の述部の構成要素の直前または直後に固定されており、他の場所には現れない要素を述部の構成要素とみなすことにする。

述部の構成要素になりうるのは次の(i)-(vii)の要素である。(i)-(iii)は主要部に先行し、(iv)-(vi)は主要部に後続する。また、(vii)の叙法辞は主要部に先行する場合と後続する場合がある。

(i) 否定詞
(ii) アスペクト辞、モダル辞
(iii) 動作主体の人称を表す要素
(iv) 連用詞 *laló'*「とても」，*benar*「ほんとうに」（程度の強さを示す。）
(v) 限定詞 *baè*「～だけ」
(vi) 動作の対象、動作の受け手を表す要素
(vii) 叙法辞（*ké'* (不確定), *mo* (起動、妥当), *po* (必要な条件), *si*（対比））

(i)-(iii)のうち複数の要素が現れる場合は、(i)-(iii)の順で現れる。

また、述部の後に現れる二つの要素（(iv) 連用詞と(v) 限定詞）が共起することはない。

(vii) 叙法辞は、述部内に (i) 否定詞、または(ii) アスペクト辞、モダル辞が現れる場合はその直後に、そうでない場合は述部の最後に現れる。(i)(ii)が共起する場合は(i)の後に現れる。

(i)-(vii)のうち、(i) 否定詞, (v) 限定詞 *baè*, (vii) 叙法辞は、動詞を含む述部だけでなく、動詞を含まない述部にも現れる。また、述部以外の位置にも現れる。

(vi)動作の対象、受け手の人称を表す要素は、動詞が他動詞である場合にのみ現れる。

この項(6.2)では、動詞を含む述部のみに、そして動詞を含む述部一般に現れる要素[(ii)ア

スペクト辞、モダル辞、(iii) 動作主体の人称を表す要素、(iv)連用詞]について述べる。

主要部が他動詞であるときにのみ現れる要素(vi)については、他動詞の構文について述べた後、6.8 で述べる。

述部以外にも現れる要素(i) 否定詞、(v) 限定詞、(vii) 叙法辞についての記述は文の構造について述べた後、10 で行う。

6.2.1　述部の構成要素と述部の主要部の結合度

述部の構成要素のうちいくつかは、音声的、統語的に主要部と強い結びつきを示す。

強勢の単位の形成

上に示した述部の構成要素(i)-(vi)のうち、(ii)アスペクト辞、モダル辞、(iii)動作主体の人称を表す要素、(iv)連用詞は、原則として主要部と一緒に強勢の単位を形成する。(72)は(ii)アスペクト辞 *ka* が現れている例、(73)は(iii)動作主体の人称を表す要素が現れている例、(74)は(ii)と(iii)の両方が現れている例、(74)は連用詞が現れている例である。

(72)　*ka=mólé'*
PERF=go.home　「帰った」(アスペクト辞（完了）+主要部「帰る」)

(73)　*ku=mólé'*
1sg.low.affix=go.home　「私は帰る」(人称辞（1SG.LOW）+主要部「帰る」)

(74)　*ka=ku=mólé'*
PERF=1sg.low=go.home　「私は帰った」
(アスペクト辞（完了）＋人称辞 1SG.LOW＋主要部「帰る」)

(75)　*rango=laló'*
big=very　「とても大きい」(主要部「大きい」+連用詞)

例外として、(ii)モダル辞のうち *na*「否定の願望」は、主要部と強勢の単位を形成しない。

(76)　*na*　*mólé'*
DESIRE.NEG　go.home　「帰らないでください」(モダル辞 *na*+主要部「帰る」)

叙法辞の介入の可否

ここで扱う述部の構成要素(ii)-(iv)のうち、モダル辞 *ya*、(iii)動作主体の人称を表す要素、(iv)連用詞が述部内に現れる場合、叙法辞は主要部とこれらの要素の間に入ることがない。

(77)は述部にモダル辞*ya*が現れている例、(78)は人称辞が現れている例、(79)は連用詞が現れている例である。それぞれの要素と主要部との間に叙法辞[8]が現れている例(77)', (78)', (79)'はそ

8　叙法辞の表す内容は、当該の文の表す内容を、話者が当該の発話を含む文脈の中で、どのようにとらえているかを示すものであることが多く、単文の訳には反映させにくい。ここでは叙法

れぞれ容認されない。

(77)　*ya=mólé'*　　***mo***
CONS=go.home　　MM
「（彼または彼女は）帰ることになる。」

(77)'　**ya*　　***mo***　　*mólé'*
CONS　　MM　　go.home
（期待される意味）「（彼または彼女は）帰ることになる。」

(78)　*ku=mólé'*　　***mo***
1SG.LOW　　MM
「私は帰る。」

(78)'　**ku*　　***mo***　　*mólé'*
1SG.LOW　　MM　　go.home
（期待される意味）「私は帰る。」

(79)　*gera=benar*　　***mo***
beautiful=really　　MM
「（彼または彼女は）本当に美しい。」

(79)'　**gera'*　　***mo***　*benar*
beautiful　　MM　really
（期待される意味）「（彼または彼女は）本当に美しい。」

述部の構成要素のうち、上記以外のものが現れる場合は、その要素と主要部の間に叙法辞が現れうる。(80)(81)はアスペクト辞 *ka*（完了）、モダル辞 *ma*（願望）と述部の主要部との間に叙法辞が現れている例である。（モダル辞 *na* に関しても同様のことがいえる。）

(80)　*ka*　　***mo***　　*mólé'*.
PERF　　MM　　go.home
「（彼は）帰った。」
[アスペクト辞 *ka*（完了）＋叙法辞（起動・妥当）＋主要部「帰る」]

(81)　*ma*　　***mo***　　*mólé'*
DESIRE　MM　　go.home　　「お帰りください。」
[アスペクト辞 *ma*（願望）＋叙法辞（起動・妥当）＋主要部「帰る」]

辞*mo*、*si*の意味は訳文に反映させない。叙法辞の意味については第 7 章で詳しく述べる。

6.2.2　動作主体の人称を表す要素

動詞の表す動作の「主体」が話し手, あるいは聞き手、あるいはそのいずれかを含む場合、その人称を表す要素が動詞の直前に現れる。主体が話し手も聞き手も含まない場合、この位置に人称詞は現れない。

この位置に現れる要素の一覧を表 5-3 に示す。

人称詞と人称辞の対立があるカテゴリーにおいては人称辞が現れる。人称辞を太字で示した。

表 5-3　述部内で動作主体の人称を表す要素の形

	単数			複数
	普通体	敬体	最敬体	
1	***ku***	*kelépé*(*-kaji*)	*kajulén*	***tu***[9]
2	***mu***	*sia*	*kelépé*	*nènè*

この位置における人称を表す要素は、述部外の補語として現れる人称詞と共起し, 相互照応を示すことがある。（補語は文の必須成分ではないので、相互照応も義務的なものではない。）

1 人称単数の例を以下に示す。

(82)　***ku****=laló*　　*si*　　***aku***
　　1SG.LOW.AFFIX=go　MM　1SG.LOW　「私は行きます。」

(83)は、2・3 人称複数の *nènè* の例である。このように人称詞と人称辞の対立がない要素

9　この位置に現れる場合、*tu*は不特定の動作主を指す場合もある。このような用法はものごとのプロセスを客観的に表現する場合によくみられる。以下に例を挙げる。これは、話者がご飯を炊く方法について述べている文で、そのプロセスとして行う動作の動作主が 1 人称複数の人称辞 *tu*によって示されている。（人称辞*tu*が現れている箇所を太字で示した。）
この会話は「わたしたちスンバワ人のごはんの炊き方」を話題とするもので、この人称辞の指示対象が話し手を含んでいるのは確かである。しかし、指示対象の境界(話し手、聞き手以外に誰を含むか)はあいまいで、不特定の対象を指示しているといえる。
（ここで人称辞の表す内容を直接訳に反映させると不自然な日本語になるため、訳出はせず、この人称辞を含む述部を太字で示した。）

（例）*ka*　*mo*　*bekela'*　*ana*　*ka*　*mo*　***tu=óló'***　*lótó*　*né*
past　MM　boil　over.there　past　MM　1PL.AFFIX=put　rice　you.know

kira-kira　*né*　*karéng*　*até*　*mudi*　*lótó*　*nan*　*né*
roughly　you.know　then　half-cooked.(of.rice)　later　rice　that　you.know

lamén　*masi*　*peno'*　*ai'*　*né*　*nan*　*nya*　*adè*　***tu=sesat****=nan*
if　still　many　water　you.know　that　3SG　nom　1PL.AFFIX=throw.away=that

「お湯が沸いたら、米を**入れて**ね、それから、しばらくして米が白くなって、もしそのときまだ水がたくさんあったら、**水を捨てる**。」[Mongka 004]

話者によれば、人称辞 *tu* は「人」を表す名詞 *tau* に由来するとのことであり、この話者の直感は、*tu* が不特定の対象を指すことと合致する。

に関しては、同じ形（人称詞）が述部内と補語の両方に現れる。（2.1.1 に示したように、*nènè* は指示対象に聞き手以外の要素も含むが、述部内に現れるのは指示対象が聞き手である場合のみである。）

(83)　*ka=**nènè**=kakan'*　*nangka*　*nan*　*léng*　***nènè***
PERF=2-3PL=eat　jackfruits　that　by　2-3PL
「あなた方はそのナンカの実を食べた。」

主体を表す要素が現れる条件

主体が１人称、２人称であっても主体の人称を表す要素が現れない場合がある。一般的な傾向として、述部が動的な状況を表す場合は人称を表す要素が現れ，述部が静的な状況を表す場合は人称を表す要素が現れない傾向がある。

この言語では、状態や性質などの静的な状況を表す動詞は、形態変化なしに，その状況に至る変化をも表す。例えば，動詞 *gera'*は，「（容姿が）美しい」という状態と「美しくなる」という変化の両方を表す。このような動詞は、述部内で人称を表す要素と共起する場合は美しい状態への変化（起動）を、共起しない場合は主語の静的な属性を表す。次の二つの例文を比較されたい。(84)のように，状態の変化を表す場合は，人称を表す要素が述部内に現れ，(84)'のように状態を表す場合は，人称辞は現れない。

(84)　***mu**=gera'*　*kau*
2SG.LOW.cl.=beautiful　2SG.LOW　「あなたは美しく**なる**。」

(84)'　***gera'***　*kau*
beautiful　2SG.LOW　「あなたは**美しい**。」

また、動作主を表す主格補語が述部の前に現れる場合は、人称辞は現れないことが多い。

(85)　***aku***　*ya=mólé'*　*kó'*　*balé.*
1SG.LOW　CONS=return　to　home
「私は家に帰ることにします。」

自然な発話では(85)のように人称を表す要素が現れない例がほとんどであるが、聞き取り調査では(85)'のように人称を表す要素が現れている例も容認される。

(85)'　aku　*ya=ku=mólé'*　*kó'*　*balé.*
1SG.LOW　CONS=1SG.LOW.AFFIX=return　to　home
「私は家に帰ることにします。」

6.2.3　アスペクト辞、モダル辞

アスペクト辞

完了を示す*ka*がある。

(86)　*ka=mangan*　*nya.*
PERF=eat　3　「彼は食事をし終えた。」

この言語ではテンス（発話時点からの時間的位置や距離）を表す要素が述部内に現れることはない。*ka* が示す完了の基準点は単文などにおいて特に指定がない場合は発話時点であるが、副詞や主文などによって指定される場合はその示す時点である。この点も含め、*ka* の機能については第６章 1.1 で詳しく述べる。

モダル辞

ya（先行する状況との結びつき）, *ma*（願望）、*na*（ある状況が成立しないことへの願望）の三つがある。

・*ya* 先行する状況との結びつきを示す。

(87) ***ya***=*datang*　*kóta*　*nya*
CONS=come　to here　3
「彼は（先行する状況の結果）来ることになった。」

・*ma* 願望（依頼、勧誘に用いられることが多い。）

(88) ***ma***=*mu*=*tedu*　*nta*.
DESIRE=2SG.AFFIX=stay　here
「(私は)あなたにここにとどまってほしい。」「ここにとどまってはどうですか。」

・*na*　ある事態が成立しないことへの願望（依頼に用いられることが多い。）

(89) ***na***　*datang*　*kóta*.
DESIRE.NEG　come　to.here
「（私は）あなたにここに来ないでほしい。」
「こちらに来ないでください。」

個々の要素の機能については、第 6 章 1 で詳しく述べる。

6.2.4　程度の甚だしさを表す連用詞（*laló’, benar*）

動詞が静的な状況を表す場合、その状況の程度が甚だしいことを示す要素として、*laló’* または *benar* のいずれかが現れる場合がある。これらの要素は先行する動詞と強勢の単位を構成する。*laló’*は日本語の「行く」に対応する動詞 *laló* に由来すると考えられる。また、*benar* は「本当である」に対応する動詞とそれぞれ同形である。

以下にそれぞれの例を示す。

(90) *peno*=***laló’***　*tau*=*ka*=*tamat*=*nan*.
many=very　person=PERF=graduate=that
「卒業した人はとても多い。」[PA123]

(91) *tódé*=*Siti*=*ta*　*béló*=***benar***　*bulu*.
child=Siti=this　long=very　hair
「シティは髪がとても長い。」[KB 003

6.3　補語

この節の冒頭で述べたように、動詞句を主要部とする述部は、名詞句補語、前置詞句補語の両方と共起する。以下の部分ではそれぞれの現れ方について述べる。

6.3.1　名詞句補語

名詞句補語の形で現れうるのは、動作主体を表す要素、動作の対象を表す要素、もののやりとりの受け手を表す要素である。

このうち、語順などの条件なく常に名詞句補語の形で現れるのは、非他動的動作を表す文においては動作主体を表す要素、他動的動作を表す文においては動作によって影響を受ける事物 (動作の対象)を表す要素である。

(92)は非他動的動作を示す例、(93)は他動的動作を示す例である。名詞句補語を太字で示した。

(92)　*ya=ku=mólé'*　*kó'*　*balé*　***aku.***
CONS=1SG.LOW.AFFIX=return　to　home　1SG.LOW
「私は家に帰ることにします。」

(93)　*ya=ku=kakan'*　***tepóng=ta***　*léng*　*aku.*
CONS=1SG.LOW.AFFIX=eat　cake=this　by　1SG.LOW
「私はこのお菓子を食べることにします。」

(92)(93)で名詞句補語として現れている要素は述部の前にも現れうる。(92)と(94)、(93)と(95)をそれぞれ対照されたい。

(94)　***aku***　*ya=mólé'*　*kó'*　*balé.*
1SG.LOW　CONS=return　to　home
「私は家に帰ることにします。」

(95)　***tepóng=ta***　*ya=ku=kakan'*　*léng*　*aku.*
cake=this　CONS=1SG.LOW.AFFIX=eat　by　1SG.LOW
「私はこのお菓子を食べることにします。」

ただし、動作の対象を表す名詞句補語（(93)(95)における名詞句補語）は、自発的な発話では、述部の後（多くの場合直後）に現れる傾向が強い。つまり、(95)のような文も容認されるが，実際の発話では(93)のような文が一般的である。

6.8 で述べるように、動作の対象が 1 人称単数である場合、および、不定の要素である場合は、それに相当する要素が常に述部内（動詞の直後）に現れる。これは、この傾向が特定の条件において、構造上の制約となったものと思われる。

他動的動作の動作主を表す要素、もののやり取りの受け手を表す要素は述部の前に現れる場合に限って名詞句補語の形で現れる。

(96)は動作主を表す要素が名詞句補語として現れている例である。

(96)　***aku***　*ya=kakan'*　*tepóng=ta*
1SG.LOW　CONS=eat　cake=this
「私はこのお菓子を食べることにします。」

(96)'のように、動作主を表す要素が名詞句補語の形で述部の後に現れている文は容認されない。

(96)'　**ya=ku=kakan'*　*tepóng=ta*　***aku***.
CONS=1SG.LOW.AFFIX=eat　cake=this　1SG.LOW
（期待される意味）「私はこのお菓子を食べることにします。」

動作主を表す要素は述部の後に現れる場合は(97)のように、前置詞句補語（前置詞 *léng* の句）として現れる。

(97)　*ya=ku=kakan'*　*tepóng=ta*　***léng***　***aku***.
CONS=1SG.LOW.AFFIX=eat　cake=this　by　1SG.LOW
「私はこのお菓子を食べることにします。」

常に（語順を問わず）名詞句補語の形で現れる要素が、非他動的動作を表す文では動作主体を表す補語であり、他動的動作を表す文では動作の対象を表す補語であるという点でこの言語は能格パターンを示すといえる。

(98)はもののやり取りの受け手を表す要素が名詞句補語で現れている例である。

(98)　***nya=Amén***　*ku=beli*　*lamong=nan*
TITLE=Amén　1SG.LOW.AFFIX=buy　clothes=that
「私はアミンにその服を買って与えた。」

(98)'のようにやり取りの受け手を表す要素が述部の後において名詞句補語の形で現れている文は容認されない。

(98)'　**ku=beli*　*lamong=nan*　***nya=Amén***
1SG.LOW.AFFIX=buy　clothes=that　TITLE=Amén
（期待される意味）「私はアミンにその服を買って与えた。」

もののやり取りの受け手を表す要素は述部の後に現れる場合は(99)のように、前置詞句補語（前置詞 *lakó/ kó* の句）として現れる。

(99)　*ku=beli*　*lamong=nan*　***lakó'/ kó'***　***nya=Amén***
1SG.LOW.AFFIX=buy　clothes=that　to　TITLE=Amén
「私はアミンにその服を買ってやった。」

6.3.2　前置詞句補語

前置詞句補語を構成する前置詞には以下のものがある。

(i) *lakó’ / kó’* ‘to’「方向」（この二つの前置詞は同じ機能を持つ。意味の違いは確認されていない。）

・移動の方向

(100) *ku=laló* *aku* ***lakó’/ kó’*** ***Lapé***
1SG.LOW.AFFIX=go 1SG.LOW to Lape
「私はラペに行った。」

・もののやりとりの受け手

(101) *ku=bèang’* *lamong=nan* ***lakó’/kó’*** ***nya=Amén***
1SG.LOW.AFFIX=give clothes=that to TITLE=Amén
「私はアミンにその服をやった。」

(102)(=(99) *ku=beli* *lamong=nan* ***lakó’/ kó’*** ***nya=Amén***
1SG.LOW.AFFIX=buy clothes=that to TITLE=Amén
「私はアミンにその服を買ってやった。」

(ii) *kalés/ kaléng* ‘from’ 「起点」（この二つの前置詞は同じ機能を持つ。意味の違いは確認されていない。）

(103) *ku=datang* ***kaléng/ kalés*** ***anósióp***
1SG.LOW.AFFIX=come from the east
「私は東の方から来た。」

(iii) *ké’* ‘with’ 「随伴者」「道具」「感情、好悪の対象」

(104) *ku=laló* *kó’* *Lapé* ***ké’*** ***ina’*** ***ku***
1SG.LOW.AFFIX =go to Lape with mother 1SG.LOW.AFFIX
「私は母親とラペに行った。」

(105) *ku=goco* *tau* ***ké’*** ***kerés***
1SG.LOW.AFFIX=stab person with sword
「私は人を剣で刺した。」

(106) *genét* ***ké’*** ***nya=Amén*** *aku*.
hate with TITLE=Amén 1SG.LOW 「私はアミンが嫌いである。」

(iv) *umén* 受・授益「～のために」

(107) *ku=beli* *jangan=nan* ***umén*** ***anak*** ***ku***.
1SG.LOW.AFFIX=buy fish=that for child 1SG.LOW.AFFIX
「私は子どものために魚を買う。」

(v) *antara* 範囲「～と～の間を」

(108) *bau'* *ké'* *sia=berari'* ***antara*** ***Samawa'*** ***ké'*** ***Pungka'***
can INTERR 2SG.HIGH=run between Sumbawa and Pungka
「あなたはスンバワとプンカの間を走れますか？」

(vi) *sampai* 限度「～まで」

(109) *bau'* *ké'* *sia=berari'* ***sampai*** ***Pungka***
can INTERR 2SG.HIGH=run to Pungka
「あなたはプンカまで走れますか？」

(vii) *léng* 他動的動作の動作主「～が、～によって」[10]

(110) *ka=pina'* *lamong'* *ku* ***léng=nya=Amén***.
PERF=make clothes 1SG.LOW.AFFIX by=TITLE=Amén.
「アミンは私の服を作った。」

6.3.3　補語の現れ方に関する制約

補語の中にはその生起に関して述部との相対的語順による制限があるものがある。

6.3.1 で述べたように、動作主、動作の受け手が名詞句補語の形で現れるのは述部の前においてのみである。（例文は(96)-(99)に示した。）

また、名詞句補語は、述部の前には一つしか現れない。次のように名詞句補語が述部の前に二つ以上現れている例は容認されない。

(111) ****nya=Amén*** ***tau=nan*** *ka=sèpak*
TITLE=Amén peson=that PERF=kick

(111)' [(111)に対応する容認される例]

(111)' ***nya=Amén*** *ka=sèpak* ***tau=nan***
TITLE=Amén PERF=kick peson=that

また、前置詞句補語の現れ方には次のような制限がある。

上で述べたように、*lakó'/ kó'*前置詞句は、移動の方向と二者間のもののやりとりの受け手の両方を表す。移動の方向を表す場合、この補語は常に述部に後続する傾向が強い。筆者の聞き取り調査では(112)(=(100))に対応する(113)のような文は容認されなかった。

(112)((=100)) *ku=laló* *aku* ***lakó'/ kó'*** ***Lapé***
1SG.LOW.AFFIX=go 1sg.low to Lape

10　この前置詞は、理由を表す接続詞(第 8 章 6)と同形である。このことから、*léng*という形式は、後続する要素が表す内容が、別の状況を引き起こしているという意味を表すという共通点があると言える。引き起こされる別の状況は、*léng*が前置詞として用いられる場合は、それが含まれる単文が表す内容であり、接続詞として用いられる場合は、主文の表す内容である。

「私はラペに行った。」

(113) ***lakó'/ kó'*　*Lapé*　*ku=laló*　*aku*
to　Lape　1SG.LOW.AFFIX=go　1SG.LOW
（期待される意味）「私はラペに行った。」

一方、*lakó'/ kó'*前置詞句が二者間のもののやりとりの受け手を表す場合は、述部の前に現れても後に現れてもよい。(114)(=102)に対応する(115)のような文も容認される。

(114)(=101) *ku=beli*　*lamong=nan*　***lakó'/ kó'***　***nya=Amén***
1SG.LOW.AFFIX=buy　clothes=that　to　TITLE=Amén
「私はアミンにその服を買って与えた。」

(115) ***lakó'/ kó'***　***nya=Amén***　*ku=beli*　*lamong=nan*
to　TITLE=Amén　1SG.LOW.AFFIX=buy　clothes=that
「私はアミンにその服を買って与えた。」

6.3.1 で述べたように、もののやりとりの受け手を表す要素は、述部に先行する場合は(116)(=(98))のように名詞句補語の形で現れる場合がある。(115)のような文と(116)のような文の違いは確認されていない。

(116) ***nya=Amén***　*ku=beli*　*lamong=nan*
TITLE=Amén　1SG.LOW.AFFIX=buy　clothes=that
「私はアミンにその服を買って与えた。」

また、他動的動作の動作主を表す *léng* 前置詞句は常に述部に後続する。(117)(=(110))に対応する(118)のような文は容認されない。

(117) *ka=pina'*　*lamong'*　*ku*　***léng=nya=Amén***.
PERF=make　clothes　1SG.LOW.AFFIX　by=TITLE=Amén.
「アミンは私の服を作った。」

(118) ***léng=nya=Amén***　*ka=pina'*　*lamong'*　*ku*.
by=TITLE=Amén　PERF=make　clothes　1SG.LOW.AFFIX.
「アミンは私の服を作った。」

他動的動作の動作主を表す語は述部に先行する場合は常に名詞句補語の形で現れる。2.1.3の(96)で示した例を再掲する。

(119)(=(96)) ***aku***　*ya=ku=kakan'*　*tepóng=ta*
1SG.LOW　CONS=1SG.LOW.AFFIX=eat　cake=this
「私はこのお菓子を食べることにします。」

その他の前置詞句補語に関しては、述部に先行する語順も後続する語順も容認される。また、それぞれの前置詞句補語に意味的に相当する要素が名詞句補語の形で現れることは、どのような語順においてもない。

6.3.4　補語の形のまとめ

以上述べてきたことから、述部の表す状況の関与者を表す要素の現れ方は以下のように整理することができる。

表 5-4　補語の意味と形の関係

	補語の意味	補語の形
A タイプ	自動的動作の主体 他動的動作の対象	常に名詞句補語
B タイプ	他動詞的動作の主体 もののやり取りの受け手	述部に先行する場合は名詞句補語、後続する場合は前置詞句補語。
C タイプ	その他（移動の方向，感情の相手、道具など）	常に前置詞句補語

6.3.5　述部に先行する補語

6.3.1, 6.3.3 で述べたように、ほとんどの補語は述部の前後いずれにもあらわれうる。一般的傾向として、述部に先行する要素は談話の焦点または主題を表すことが多い。

前置詞句補語として述部に先行する要素は談話の焦点を表すことが多い。

(120) ***ké'*** ***nya=Amén*** *ku=laló* *kóna*.
with TITLE=Amén 1SG.LOW.AFFIX=go to there
「私は（他の人とではなく）アミンとむこうへ行く。」

(121) ***umén*** ***sia*** *ku=datang* *kóta*.
for the benefit of 2SG.HIGH 1SG.LOW.AFFIX=come to here
「（他の人ではなく）あなたのために私はここに来た。」

名詞句補語として述部に先行する要素は談話の主題を表すことが多い。

(122)-(125)は上で(94)(95)(96)および(98)として示した例文である。(122)では非他動的動作の動作主を表す名詞句補語が、(123)では動作の対象を表す名詞句補語が、(124)ではやりとりの受け手を表す名詞句補語が、(125)では他動的動作の動作主を表す名詞句補語が述部に先行している。このような文において、名詞句補語は談話の主題を表すことが多い。

(122)(=(94)) ***aku*** *ya=ku=mólé'* *kó'* *balé*.
1SG.LOW CONS=1SG.LOW.AFFIX=return to home
「私は家に帰ることにします。」

(123)(=(95)) ***tepóng=ta*** *ya=ku=kakan'* *léng* *aku*.
cake=this CONS=1SG.LOW.AFFIX.=eat by 1SG.LOW
「このお菓子は私が食べることにします。」

(124)(=(96))　***aku***　*ya=ku=kakan'*　*tepóng=ta*
1SG.LOW　CONS=1SG.LOW.AFFIX=eat　cake=this
「私はこのお菓子を食べることにします。」

(125)(=(98))　***nya=Amén***　*ku=bèang'*　*lamong'*　*ku.*
TITLE=Amén　1SG.LOW.AFFIX=give　clothes　1SG.LOW.AFFIX
「アミンには私は私の服をあげた。」

述部に先行する名詞句補語は談話の焦点を表す場合もある。

述部に先行する名詞句補語内に叙法辞 *ké'*（不確定）、*po*（条件）、*mo*（起動、妥当）が現れる場合、叙法辞は、名詞句補語の表す内容が伝達における焦点であるということを示す。以下に *ké'*が現れる例を示す。（叙法辞については、10.3 および第 7 章で詳しく述べる。）

(126)　*tau=nan*　***ké'***　*ya=mólé'*　*kó'*　*balé.*
person=that　INTERR　CONS=return　to　home
「（他の人でなく）その人が家に帰るのですか。」

(127)　*tepóng=nan*　***ké'***　*ya=mu=kakan'*
cake=that　INTERR　CONS=2SG.LOW.AFFIX=eat
「あなたは（他のものでなく）そのお菓子を食べるのですか。」

(128)　*nya=Amén*　***ké'***　*mu=bèang'*　*lamong'*　*ku.*
TITLE=Amén　INTERR　2SG.LOW.AFFIX=give　clothes　1SG.LOW.AFFIX
「あなたは（他の人にではなく）アミンに私の服をあげるのですか。」

(129)　*nya=Amén*　***ké'***　*ya= kakan'*　*tepóng=ta*
1SG.LOW　INTERR　CONS=eat　cake=this
「（他の人でなく）アミンがこのお菓子を食べるのですか。」

6.4　自動詞構文と他動詞構文

述部内の用言に先行する動作主体を表す人称辞と相互照応を示すのは、(130)のように、非他動的動作を表す動詞を含む文においては名詞句補語、(131)のように、他動的動詞を表す動詞を含む文においては前置詞 *léng* を含む前置詞句補語である。

(130)(=92)　*ya=**ku**=mólé'*　*kó'*　*balé*　***aku***.
CONS=1SG.LOW.AFFIX=return　to　home　1SG.LOW
「私は家に帰ることにします。」

(131) (=93)　*ya=**ku**=kakan'*　*tepóng=ta*　***léng***　***aku***.
CONS=1SG.LOW.AFFIX.=eat　cake=this　by　1SG.LOW.
「私はこのお菓子を食べることにします。」

本稿では、(130)のような構文を自動詞構文とよび、(131)のような構文を他動詞構文と呼ぶ。また、動詞のうち、他動詞構文に現れうる動詞を他動詞と呼び、それ以外を自動詞と呼ぶ。

動作主を表す補語はいずれの構文においても必須の成分ではない。また、述部内の人称辞は動作主が 3 人称の場合には現れない。このため、人称辞と補語の相互照応は常に見られるとは限らない。本稿ではそのような場合も、(130)のような文と意味的、形式的に対応する文を自動詞構文、(131)のような文と意味的、形式的に対応する文を他動詞構文と呼ぶことにする。

6.5　主語と目的語

上で述べたように、自動詞構文においても、他動詞構文においても、動作の主体を表す語は、述部内の人称代名詞と相互照応を示す。（この言語はこの点では対格パターンを示す。）以下の部分では、記述の便宜上、いずれの構文においても動作主体を表す補語を主語と呼ぶことにする。

(132)では *aku* (1SG.LOW)が、(133)では *léng aku* (by 1SG.LOW)が、(134)では *aku* (1SG.LOW)がそれぞれ主語である。

(132)　***ku**=laló*　*mo*　***aku***
1SG.LOW.AFFIX=go　MM　1SG.LOW　「**私は**行きます。」

(133)　*ka=**ku**=kakan'*　*nangka=nan*　***léng***　***aku***
PERF=1SG.LOW.AFFIX=eat　jackfruits=that　by　1SG.LOW
「**私は**そのナンカの実を食べた。」

(134)　***aku***　*ka=**ku**=kakan'*　*nangka=nan*.
1SG.LOW　PERF=1SG.LOW.AFFIX=eat　jackfruits=that
「**私は**そのナンカの実を食べた。」

先に述べたように、この言語は、補語の形に関しては能格パターンを示すため、「主語」の形は自動詞構文と他動詞構文とで異なる。（自動詞構文では名詞句補語として、他動詞構文では前置詞句補語として現れる。ただし、6.3 で扱ったように、他動詞構文においても、述部に先行する場合は名詞句補語として現れる。）

第 2 節で示したように、述部内に人称代名詞が現れるのは、動作主体が話し手、または聞き手を含む場合のみである。それ以外の場合は、動作主体を表す語は、述部との相互照応を示さない。以下に動作主体が話し手、聞き手以外である例を示す。

(135) *laló*　*mo*　*nya*
go　MM　3　「彼は行きます。」

(136) *ka=kakan'*　*nangka=nan*　*léng*　*nya*
PERF=eat　jackfruits=that　by　3　「彼はそのナンカの実を食べた。」

3 人称指示の動作主体を表す語は、述部との相互照応を示さないことを除けば、1 人称、2 人称指示の動作主体を表す語と常に同様の機能を持つ。そのため、本稿では、この場合も動作主体を表す語を主語と呼ぶ。

また、本稿では、他動詞構文において常に（述部との相対的位置関係にかかわらず）名詞句補語の形で現れる要素を記述の便宜上目的語と呼ぶことにする。たとえば(133)(134)(136)では *nangka=nan*「そのジャックフルーツ」が目的語である。

多くの場合目的語は述部の表す状況の影響を受ける要素を表す。（目的語の表す内容については 6.7 でさらに詳しく述べる。）

主語、目的語の形態についてまとめると以下のようになる。

	主語	**目的語**
自動詞構文での形	名詞句補語	×（現れない）
他動詞構文での形	前置詞句補語（*léng* 前置詞句）	名詞句補語

以上、6.1-6.5 で動詞を述部の主要部とする文の概略を述べた。

この言語の動詞を述部の主要部とする構文の特徴として、他動詞構文の「態」のシステムの単純さが挙げられる。スンバワ語には他動詞構文が一種類しか存在せず、近隣の西インドネシア諸語にみられる種々の態の転換のシステムがみられない。この点に関して、スンバワ語と近隣の西インドネシア諸語であるマレー語との比較を行い、補遺として付す。

以下の部分では、動詞を述部の主要部とする文、あるいはその構成要素のうち、より特殊なものを扱う。

6.6　例外的な自動詞の構文

自動詞の中には、動作主体を表す主語以外の名詞句補語と共起するものがある。

そのような自動詞には以下のものがある。

・*ada'*「～がある」
・*dadi*「～になる」
・*basingén*「～という名前である」
・*dapat*「～に到着する」

これらの動詞はいずれも動作主体以外に密接な関係を持つ事物（主語以外の名詞句補語の指示物）が存在するような状況を表し、なおかつ、他動的な状況を表さないという特徴を持つ。

まず、存在を表す自動詞 *ada'*の例を示す。*ada'*を含む述部は存在物を指す名詞句補語、お

よび、所有者を指す名詞句補語と共起する。

(137) *nya* *ada'* *dengan*.
3 exist company
[所有者を表す要素]　[動詞]　[存在物を表す補語]
「彼には連れがいる。」

このうち、存在物を表す補語は必ず(137)のように述部の直後に現れる。(138)のように述部の前に現れている例は容認されない。

(138) **nya* *dengan* *ada'*
3 company exist （期待される意味）「彼には友だちがいる」

(138)' **dengan* *ada'*
company exist（期待される意味）「友だちがいる」

このことから、存在物を表す補語は述部の一部であると解釈することができる。（「述部の範囲」にかんする定義は 6.2 で行った。）

所有者を表す補語は、一般的な自動詞構文における主語と同様、述部の前にも後にも現れうる。

(139) *nya* *ada'* *dengan*.
3 exist company 「彼には連れがいる。」

(140) *ada'* *dengan* *nya*.
exist company 3 「彼には連れがいる。」

ただし、*ada'*の後に一つだけ名詞句が現れる場合、その指示物は存在物であると解釈される。(141)は「私が存在する」と解釈され、「私が何かを持っている」という意味にはならない。

(141) *ada'* *aku*
exist 1SG.LOW 「私がいる。」

数量詞（*sópó'*「１、一つ」、*dua*「２、二つ」、*peno'*「たくさん」、*sedi'*「少し」など）が述部に現れる場合、*ada'*と同様の構文が現れる。以下に例を挙げる。この場合も存在物を表す名詞句が述部の直後に現れる。この場合もその名詞句は述部の一部であると解釈できる。

(142) *nya* *telu* *dengan*.
3 three company 「彼には連れが三人いる。」

(143) *telu* *dengan* *nya*.
three company 3 「彼には連れが三人いる。」

存在物を表す補語が述部の前に現れている次のような例は容認されない[11]。

(144) **dengan*　*telu.*
company　three　（期待される意味）「連れが 3 人いる。」

(142)(143)に示したように、所有者を表す名詞句は、一般的な自動詞構文における主語同様、述部の前後いずれにも現れうる。ただし、数量詞に一つだけ名詞句が後続する場合、その指示物は存在物であると解釈される。

(145) *telu*　*nya.*
three　3　「彼らは三人いる。」

次に、*ada'*、数量詞以外の動詞の文の例を見る。この場合も同様の構文が現れる。(146)-(148)はいずれも、主語が 1 人称普通体である例である。述部内に現れる要素を太字で示した。

・*dadi*「～になる」
変化後の属性を表す語が述部内に現れる。

(146) *ku=dadi*　***kórnét***　***damri***　*aku*
1SG.LOW.AFFIX=become　conductor　damri　1SG.LOW
「私はダムリ（バス会社の一つ）の車掌になる。」

・*basingén*「～という名前である」
名前を表す語が述部内に現れる。

(147) *ku=basingén*　***Bakér***　*aku*
1SG.LOW.AFFIX　Bakir　1SG.LOW
「私の名前は Bakir である。」

・*dapat*「～に到着する」
到着した場所を表す語が述部内に現れる。

(148) *ku=dapat*　***Samawa'***　*aku.*
1SG.LOW.AFFIX=arrive　Sumbawa　1SG.LOW
「私はスンバワに到着する。」

6.7　動作の影響を受ける事物が二つ想定できる状況を表す文

6.5 で、目的語は述部の表す状況の影響を受ける要素であると述べた。他動詞の中には、動作によって影響を受ける事物が二つ想定できるような状況を表すものがある。ここではそ

11　*telu*「3, 三」が*dengan*「連れ」を修飾して「三人の連れ」という意味が表される場合は二つの単語が強勢の単位を形成し、*dengan=telu*と発音される。

のような状況を表す構文について述べる。そのような状況は主に次の(i)(ii)に分類できる。
(i) 二者間のもののやりとりを表すもの
（*bèang'*「与える」, *sempét*「送る」, *sólé'*「借りる」など[12]）
(ii) 動作主がある事物を操作してある場所へはたらきかける動作を表すもの
（*tanam*「植える」、*gantong'*「架ける」など）

(i)のタイプの動詞の文ではやりとりされるものが目的語によって表され、(ii)のタイプの動詞の文では、動作主が直接操作するものが目的語によって表される。
やりとりの受け手や、動作によって影響を受ける場所など、より間接的な影響を受ける事物は前置詞句補語として現れる。

(149) *ku=bèang'*　*lamong=nan*　*kó'*　*ina'*　*ku.*
1SG.LOW.AFFIX=give　clothes=that　to　mother　1SG.LOW.AFFIX
「私は母にその服をあげた。」

(150) *ku=gantong'*　*lamong=nan*　*pang'*　*kursi.*
1SG.LOW.AFFIX=hang　clothes=that　at　chair
「私は椅子にその服を架けた。」

ただし、既に 6.3.1 で述べたように、もののやり取りを表す動詞の文において、やり取りの受け手を表す要素は、述部に先行する場合は名詞句補語の形で現れうる。（例文は(96)に示した。）また、やりとりの受け手が話し手、または聞き手である場合は、その人称に対応する人称辞、または人称詞が述部内に現れることがある。（この場合については 6.8.3 で扱う。）

動詞の中には例外的に二つの目的語と共起するものがある。このような動詞の多くはその表す動作によって影響を受ける事物が二つ想定できるような状況を表し、またその動作が(i)にも(ii)にも分類しがたいものである。このタイプの動詞には以下のようなものがある。

・*sanadi*「～を～にする，～で～を作る」
（材料を表す語と成果物を表す語の両方が目的語として扱われる。）
(151) *ka=sanadi*　***dipan***　***ban=ta***　*léng*　*nya*
PERF=caus.become　bed　wood=this　by　3
「彼は，その材木から寝台を作った。」

12　第 4 章 2.1.1 で扱った接頭辞*sa-*を含む動詞のうち使役を表すものの一部もこのタイプにあてはまる。
（例）*sangenti'*「（何かを）手につかませる、渡す」< *enti'*「つかむ」、
sangita'「見せる」< *gita'*「見る」

・*ajar*「教える」
（教えられる人と教えられる内容を表す語の両方が目的語として扱われる。）

(152) *ku=ajar* ***tau=Jepang*** ***Basa=Samawa'*** *léng* *aku.*
1SG.LOW.AFFIX=teach person=Japan language=Sumbawa by 1SG.LOW
「私は日本人にスンバワ語を教えている。」

・*sasingén*「名付ける」
（名付けられる人と名前を表す語の両方が目的語として扱われる。）

(153) *ya=sasingén* ***Wati*** ***anak=ta*** *léng* *bapa'.*
CONS=name Wati child=this by father
「父親はこの子をワティと名づけた。」

6.8　他動詞を含む述部内に現れうる要素

他動詞の表す動作の対象、または動作の受け手を表す要素は、通常、補語の形で現れ、その述部との相対的語順には制約がない。しかし、述部の主要部の動詞や関与者の人称によっては、動作の対象や受け手などを表す要素の位置が、他動詞の直後に固定される場合がある。そのようなものには次の４種類がある。

・動作の対象を表すもの

(i) 動作の対象を表す 1 人称（単数）人称辞

(ii) 「不定」の対象を表す名詞（いわゆる抱合の場合）

・動作の受け手を表すもの

(iii) やりとりの受け手を表す人称辞（1 人称単数）または人称詞（1 人称複数、2 人称）

(iv) 命令や許可、発話の受け手を表す要素

これらの要素は常に述部の主要部である動詞の直後に現れ、動詞とこれらの要素の間に叙法辞や限定詞などが入ることはない。このことを根拠に、本稿ではこれらの要素も述部の構成要素として扱うことにする。

以下の部分では(i)-(iv)それぞれについて 6.8.1-6.8.4 で順に述べる。

6.8.1　動作の対象を表す 1 人称人称辞

他動詞の表す動作の対象が話し手自身（単独）である場合は、1 人称の人称辞(6.2.2 の表 5-3 で示した形)が動詞の直後に現れる[1314]。

13　6.3.1 で述べたように、一般に、動作の対象を表す要素は、述部の直後に現れることが多い。ただし、動作の対象が話し手(単数)以外である場合は、述部の直後以外に現れる文も許容される。

以下に例を挙げる。(a)(b)の表す状況において、動作の対象は聞き手（単独）である。この場合、自発的な発話を観察すると、(a)のように人称詞が動詞の直後に現れる場合が圧倒的に多いが、聞き取り調査によれば、(b)のように動詞の直後に現れない文も許容される。このため、動作の対象が 1 人称複数、２人称、３人称である場合は、それに対応する要素は述部の外にある補

(154)　*sapèrap*　*ka=sèpak*　***ku***　*léng*　*tau*.
yesterday　PERF=kick　1SG.LOW.AFFIX　by　person.
「昨日**私は**人に蹴られた。」

このような内容を表す文において、1 人称単数代名詞が、述部の直後以外の位置に現れることはない。(155)のような文は容認されない。

(155)　**sapèrap*　*ka=sèpak*　*léng*　*tau*　***aku***.
yesterday　PERF=kick　by　person　1SG.LOW.
（期待される意味）「昨日**私は**人に蹴られた。」

述部内に現れる動作主体を表す人称辞と異なり、この種の人称辞は補語と相互照応を示すことはない。

(156)　**sapèrap*　*ka=sèpak*　***ku***　*léng*　*tau*　***aku***.
yesterday　PERF=kick　1SG.LOW.AFFIX　by　person　1SG.LOW.
（期待される意味）「昨日**私は**人に蹴られた。」

(157)　****aku***　*sapèrap*　*ka=sèpak*　***ku***　*léng*　*tau*
1SG.LOW　yesterday　PERF=kick　1SG.LOW.AFFIX　by　person.
（期待される意味）「昨日**私は**人に蹴られた。」

6.8.2　動作の対象を表す要素の抱合

動作の対象が「不定」である場合、それを表す要素が動詞の直後に現れ、動詞と一緒に強勢の単位を構成する場合がある。このような構文を，目的語が抱合された構文と呼ぶ。以下に抱合された構文の例(158)と、対応する一般の他動詞構文の例(159)を挙げる。

(158)　*ka=ku=inóm=**kawa***　*aku*.
PERF=1SG=drink=coffee　1SG.LOW

語（主格補語）として現れていると考えるのが妥当である。

(a)　*sapèrap*　*ka=sèpak*　***kau***　*léng*　*tau*.
yesterday　PERF=kick　2SG.LOW　by　person.
「昨日**あなたは**人に蹴られた。」

(b)　*sapèrap*　*ka=sèpak*　*léng*　*tau*　***kau***.
yesterday　PERF=kick　by　person　2SG.LOW.
「昨日**あなたは**人に蹴られた。」

14　*ku*は強勢を持たないため、(154)のように後続する要素がある場合、（通常のスピードの発話では、）その要素と強勢の単位を構成しているかのように聞こえる。

(154)'　*sapèrap*　*ka=sèpak*　***ku**=léng*　*tau*.
yesterday　PERF=kick　1SG.LOW.AFFIX=by　person.
「昨日**私は**人に蹴られた。」

「私は**コーヒーを**飲んだ。」

(159) *ka=ku=inóm* ***kawa=nan*** *léng=aku.*
PERF=1SG.LOW.AFFIX=drink coffee=that by=1SG
「私は**コーヒーを**飲んだ。」

抱合された構文は、主語の現れ方に関して自動詞構文と似た特徴を持つ。(158)と(159)を比較すればわかるように、主語は一般的な他動詞構文(159)では前置詞句補語として現れるが、抱合された構文(158)では名詞句補語として現れる。

上で触れたように、目的語が抱合された構文は、動作の対象が不定である場合に用いられる。以下に，話者の自発的な発話からの例をいくつか挙げる。(160)(161)は会話からの引用，(162)は物語の地の文からの引用、(163)は物語の会話部分の引用である。

(160) *ya=pina=**wajik**?*
CONS=make=rice cake
「**ワジック**（お菓子の一種）を作るつもりなのかい？」[wajik 013]

(161) *kènang=**panci,*** *ato* *kènang=**apa*** *ato* *kènang'* *ké'* *sugan*?
use=pot or use=what or use INTERR pan
「（ワジックを作るのに）**鍋を**使うの？それとも，**何を**使う？それか，フライパンを使うの？」[wajik 043]

(162) *malóm* *tódé',* *nó* *to=**tegas**.*
as you know child NEG know=meaning
「おわかりのとおり，（彼は）子どもで，**道理が**わかっていなかった。」[BL 035]

(163) *wé* *ka* *mo=tumpan=**lamong'**.*
oh PERF MM=get=clothes
「ああ，（彼女は）もう，**服を**取り戻してしまった。」[LK 127]

この種の抱合は，動作の対象が定である場合には，起こらない。常に定の解釈を受ける名詞句、たとえば(i)指示詞を含む名詞句や(ii)人称代名詞が抱合を受けることはない。

(i) 指示詞を含む名詞句

上に挙げた(159)に対応する(164)のような例は容認されない。

(164) **ka=ku=inóm=**kawa=nan*** *aku*
PERF=1SG.LOW.AFFIX=drink=coffee=that 1SG.LOW
（期待される意味）「私はコーヒーを飲んだ。」

(ii) 人称代名詞

人称代名詞が抱合を受けている(165)のような例は容認されない。

(165) **beri=**sia*** *nya*
like=2SG.HIGH 3
（期待される意味）「彼は**あなたのことが**好きだ。」

cf. (165)に対応する容認される例

(166)　*beri'*　***sia***　*léng=nya*.
like　2SG.HIGH　by=3　「彼は**あなたのことが**好きだ。」

6.8.3　もののやりとりの受け手を表す人称辞、人称詞

もののやりとりを表す動詞が述部の主要部で、動作の受け手が話し手、聞き手を含む場合は、その人称に対応する人称辞または人称詞が動詞の直後に現れる。この要素は述部外の補語と相互照応を示すことはない。

この位置に現れる形を表 5-5 に挙げる。原則として人称詞（2.1.1 の表 5-1 の形）が現れるが、例外として 1 人称単数普通体では人称辞（6.2.2 の表 5-3 の形）が用いられる。

表 5-5　**述部内でもののやり取りの受け手の人称を表す要素の形**

	単数			複数
	普通体	敬体	最敬体	
1	*ku*	*kaji*	*kajulén*	*kita* 包括形 *kami* 排除形
2	*kau*	*sia*	*kelépé*(*-kaji*)	*nènè*

(167)はもののやりとりの受け手が 1 人称単数普通体である場合の例である。ここでは人称辞が現れている。

(167)　*ya=bèang'*　***ku***　*lamong=nan*.
CONS=give　1SG.LOW.AFFIX　clothes=that
「**私は**その服をもらうことになります。」

(168)(169)はもののやり取りの受け手がそれぞれ 1 人称複数（排除形）、２人称単数普通体である場合である。いずれの場合も人称詞が現れる。この位置に人称辞が現れることはない。

(168)　*ka=bèang'*　***kami***　*lamong=nan*.
PERF=give　1PL.EXCL　clothes=that
「**私たちは**その服をもらいました。」

(169)　*ya=ku=bèang'*　***kau***　*lamong=nan*.
CONS=1SG.LOW.AFFIX=give　2SG.LOW　clothes=that
「私は**あなたに**その服をあげることにします。」

6.3.2 で述べたように、一般には、動作の受け手をあらわす要素は、方向を表す前置詞 *lakó/ 'kó'*に導かれる前置詞句補語の形で現れる。（この場合は述部の直後以外の位置にも現れうる。）

(170)　*ya=bèang'*　*lamong=nan*　*la**kó'/ kó'***　***nya***.
CONS=give　clothes=that　to　3
「**彼は**その服をもらうことになります。」

(171)　**ya=bèang'*　***nya***　*lamong=nan*.
CONS=give　3　clothes=that

動作の受け手が話し手、聞き手を含む場合は、上に示した(167)-(169)のような構文と、それに対応する(172)-(174)のような構文の両方が許容される。(167)と(172), (168)と(173), (168)と(174)をそれぞれ対比されたい。（ただし、自発的な発話を観察すると、(167)-(169)のように動作の受け手が述部内に現れる場合がほとんどである。）

(172)　*ya=bèang'*　*lamong=nan*　***kó' aku.***
CONS=give　clothes=that　to　1SG.LOW
「**私は**その服をもらうことになります。」

(173)　*ka=bèang'*　*lamong=nan*　***kó' kami***.
CONS=1SG.HIGH=give　clothes=that　to　1PL.EXCL
「**私たちは**その服をもらいました。」

(174)　*ya=kaji=bèang'*　*lamong=nan*　***kó' kau.***
CONS=1SG.HIGH=give　clothes=that　to　2SG.LOW
「私は**あなたに**その服をあげることにします。」

もののやりとりを表す動詞が述部の主要部で、やりとりされるもの、やりとりの受け手の両方が1人称または2人称である場合は、やりとりされるものを表す人称詞が述部内に現れ、やりとりの受け手は前置詞句補語として現れる。

(175)　*ya=bèang'*　***ku***　*kó'*　*kau*.
CONS=give　1SG.LOW.AFFIX　to　2SG.LOW
「（彼または彼女が）私をおまえに与えることになる。」

(176)　*ya=bèang'*　***kau***　***kó'*** ***aku***.
CONS=give　2SG.LOW　to　1SG.LOW
「（彼または彼女が）おまえを私に与えることになる。」

両方が述部内に現れる文は許容されない。

(177)　**ya=bèang'*　***ku***　***kau***.
CONS=give　1SG.LOW.AFFIX　2SG.LOW
（期待される意味）「（彼または彼女が）私におまえを与えることになる。」

(178)　**ya=bèang'*　***kau***　***ku***.
CONS=give　2SG.LOW　1SG.LOW.AFFIX
（期待される意味）「（彼または彼女が）おまえに私を与えることになる。」

6.8.4　命令や許可、伝達・発話の受け手を表す要素

述部の主要部が命令や許可、発話を表す他動詞である場合、命令や許可、発話の受け手を表す要素は動詞の直後に名詞句補語として現れる。これは当該の要素が人称詞であるか普通名詞であるか、また定であるか否かにかかわりない。

まず、動詞 *suru'*「命令する」の例を示す。命令の受け手を表す要素は(179)では 1 人称、(180)では 2 人称、(181)-(182)では 3 人称である。

(179) *nya=Amén*　*suru'*　***ku***　*berari'*
TITLE=Amén　order　1SG.LOW.AFFIX　run
「アミンはわたしに走るように命令した。」

(180) *nya=Amén*　*suru'*　***kau***　*berari'*.
TITLE=Amén　order　2SG.LOW　run
「アミンはお前に走るように命令した。」

(181) *ku=suru'*　***nya***　*berari'*.
1SG.LOW.AFFIX=order　3　run
「私は彼に走るように命令した。」

(182) *ku=suru'*　***nya=Amén***　*berari'*.
1SG.LOW.AFFIX=order　TITLE=Amén　run　「私はアミンに走るように命令した。」

この位置での人称形の現れ方は以下のとおりである。命令の受け手が人称形で現れる場合、その要素は、原則として(180)(181)のように人称詞（2.1.1 の表 5-1 の形）の形で現れる。例外として、1 人称単数普通体では(179)のように人称辞（6.2.2 の表 5-3 の形）*ku* が用いられる。（この現れ方はもののやりとりの受け手を表す要素の現れ方と同様である。）

前項のもののやりとりの受け手を表す要素と同様、この種の要素は、述部の直後に現れない場合は、前置詞 *kó'*を含む前置詞句補語として現れる。上の(179)と下の(183)を対比されたい。

(183) *nya=Amén*　*suru'*　*berari'*　***kó'***　***aku***.
TITLE=Amén　order　run　to　1SG.LOW
「アミンはわたしに走るように命令した。」

この動詞の構文において、命令の内容は従属文によって表される。その現れ方については第 8 章 5.3 で述べる。

次に、伝達を表す他動詞 *bada'*「伝える」の例を挙げる。

発話の受け手を表す要素は(184)では 1 人称、(185)では 2 人称、(186)では 3 人称である。この場合、それぞれの要素は常に述部の直後に現れる。（それぞれの形は上で扱った命令の受け手を表す要素の形と同じである。）

(184) *ka=bada'* ***ku*** *rungan=nan* *léng* *nya.*
PERF=tell 1SG.LOW.AFFIX news=that by 3
「彼は私にその知らせを伝えた。」

(185) *ka=ku=bada'* ***kau*** *rungan=nan.*
PERF=1SG.LOW.AFFIX=tell 2SG.LOW news=that
「私はお前にその知らせを伝えた。」

(186) *ka=ku=bada'* ***nya=Amén*** *rungan=nan.*
PERF=1SG.LOW.AFFIX=tell title=Amin news=that
「私はアミンにその知らせを伝えた。」

(184)-(186)は、伝達の内容を表す補語が目的語として現れている例であるが、発話の内容を表す要素は以下の(187)のように従属文の形で現れる場合もある。

(187) *ka=bada'* *ku* [*datang* *ina'* *ku*] *léng* *nya.*
PERF=tell 1SG.LOW.AFFIX come mother 1SG.LOW.AFFIX by 3
「彼は私に私の母親が来たことを伝えた。」

この場合の従属文の現れ方については第 8 章 4.2 で述べる。

6.8.5　6.8 のまとめ

6.8.1-6.8.4 で見てきた要素は、他の補語とは異なり、語順が動詞の直後に固定されている。

このことから、これらの要素は述部の一部であると考えることができる。6.8.1, 6.8.3 に関して、話し手を表す要素が人称辞の形で現れること、6.8.2 において全体で強勢の単位が形成されることは、動詞とそれぞれの要素の結びつきの強さを反映していると言える。

7　副詞成分

この章の冒頭で述べたように、文の成分は述部、補語、副詞成分である。5 および 6 では述部と補語を中心に文の構造について述べてきた。この項では副詞成分について述べる。

第 1 節で述べたように、本稿で副詞成分として扱うのは、副詞句および場所を表す前置詞句（*pang'*および *N*）である。副詞成分は、共起する述部のタイプ（主要部の語類）、文中での位置に関する制約を基準に以下のように分類できる。

[A] 述部のタイプを問わず現れ、文中の位置に制限がないもの。

場所を表す前置詞 *pang'*の句、ときをあらわす副詞句は、述部のタイプを問わず現れる。これらの要素は述部の前後いずれにも現れうるが、自然な発話では述部の前に現れることが

多い。

名詞句、副詞句、前置詞句、動詞句を主要部とする述部と共起する例をそれぞれ挙げる。

・名詞句が述部の主要部である例

(188)　***anó=ta***　*aku*　*guru.*
day=this　1SG.LOW　teacher
「**今日は**私が先生だ。」

(189)　*aku*　*guru*　***anó=ta***.
1SG.LOW　teacher　day=this
「**今日は**私が先生だ。」

(190)　***pang=ta***　*aku*　*guru.*
at=this　1SG.LOW　teacher
「**ここでは**私が先生だ。」

(191)　*aku*　*guru*　***pang=ta***.
1SG.LOW　teacher　at=this
「**ここでは**私が先生だ。」

・副詞句が述部の主要部である例

(192)　***pang=ta***　*jangi=nan*　*jam=telu.*
at=this　appointment=that　o'clock=three　「**ここでは**約束は三時だ。」

(193)　*jam=telu*　*jangi=nan*　***pang=ta***
time=three　promise=that　at=this
「**ここでは**約束は三時だ。」

この場合、述部の主要部である副詞句と副詞成分として機能する副詞句、二つの副詞句が現れる文も許容される。この場合、二つの副詞句のどちらがどちらの機能を持つか、形式上は明らかではない。（以下の例文では、一般的知識によってどちらがどちらであるかの判断が可能となっている。）

(194)　***anó-Senin***　*jangi=nan*　***jam=telu***.
Monday　promise=that　o'clock=three
「**月曜日**、約束は**三時**だ。」

(195)　***jam=telu***　*jangi=nan*　***anó-Semin***.
time=three　promise=that　Monday
「**月曜日**、約束は**三時**だ。」

・前置詞句が述部の主要部である例

(196)　***anó=ta***　*aku*　*pang'*　*balé*
day=this　1SG.LOW　at　house
「**今日は**私は家にいる。」

(197)　*aku*　*pang'*　*balé*　***anó=ta***
1SG.LOW　at　house　day=this
「**今日は**私は家にいる。」

一つの文に二つの *pang'*前置詞句が現れる例も許容される。この場合もどちらが述部でどちらが副詞成分であるかは、形式には反映されない。

(198)　***pang'***　***Samawa'***　*aku*　***pang'***　***hotèl=Tambora.***
at　Sumbawa　1SG.LOW　at　hotel=Tambora
「**スンバワでは**私は**タンボラホテルに**いる。」

(199)　*aku*　***pang'***　***Samawa'***　***pang'***　***hotèl=Tambora***
1SG.LOW　at　Sumbawa　at　hotel=Tambora
「**スンバワでは**私は**タンボラホテルに**いる。」

・動詞句が述部の主要部である例

(200)　*mólé'*　*nya*　***jam=telu***.
go.home　3　o'clock=three
「彼は**三時に**帰る。」

(201)　***jam=telu***　*mólé'*　*nya*.
o'clock=three　go.home　3
「彼は**三時に**帰る。」

[B] 述部のタイプを問わず現れ、述部に先行するもの。

命題の表す状況の確かさに関する話者の判断を表す副詞、*mesti*「必ず～する」、*brangkali*「おそらく」などは、述部のタイプを問わず文中に現れうる。これらの副詞は常に述部の前に現れる。（否定詞などと異なり、述部の直前に現れるとは限らない。以下の例文(202)-(205)のように補語が副詞と述部との間に入ることもあれば、(202)'-(205)'のように文頭に現れることもある。）

以下に*mesti*「きっと」「～に違いない」の例を示す。

(202)　***mesti***　*nya*　*guru*.
surely　3　teacher
「**きっと**彼は先生だ。」

(202)’ *nya* ***mesti*** *guru*.
3 surely teacher
「**きっと**彼は先生だ。」

(202) ***mesti*** *nya* *pang’* *balé*.
surely 3 at house
「**きっと**彼は家にいる。」

(203)’ *nya* ***mesti*** *pang’* *balé*.
3 surely at house
「**きっと**彼は家にいる。」

(204) ***mesti*** *pèsta=nan* *anó-Ahad*.
surely party=that Sunday
「パーティは日曜日に**ちがいない**。」

(204)’ *pèsta=nan* ***mesti*** *anó-Ahad*.
party=that surely Sunday
「パーティは日曜日に**ちがいない**。」

(205) ***mesti*** *nya* *datang* *kóta*.
surely 3 come to.here
「彼は**きっと**ここに来る。」
(205)’ *nya* ***mesti*** *datang* *kóta*.
3 surely come to.here
「彼は**きっと**ここに来る。」

mesti が述部の後に現れている文は容認されない。(202)-(205)に対応する(202)’’-(205)’’はそれぞれ容認されない。

(202)’’ **nya* *guru* ***mesti***.
3 teacher surely
(期待される意味)「**きっと**彼は先生だ。」

(203)’’ **nya* *pang’* *balé* ***mesti***.
3 at house surely
(期待される意味)「**きっと**彼は家にいる。」

(204)’’ **pèsta=nan*　*anó-Ahad*　***mesti***.
party=that　Sunday　surely
(期待される意味)「パーティは日曜日に**ちがいない**。」

(205)’’ **nya*　*datang*　*kóta*　***mesti***.
3　come　to.here　surely
(期待される意味)「彼は**きっと**ここに来る。」

[C] 動詞を述部の主要部とする文にのみ表れ、文中の位置に制限がないもの。

様態を表す副詞の多くは動詞を述部の主要部とする文にのみ現れる。これらの多くは文中での位置に制限がない。ただし、自然な発話では[A]と同様、述部の前に現れることが多い。

この種の副詞には *laó-laó’*「ゆっくりと～する」、*lè’*「長い間」、*jaga-jaga*「朝早く」、*mèsa-mèsa’*「一人ぼっちで」、*terés-terés*「間断なく」などがある。

laó-laó’「ゆっくりと～する」の例を以下に示す。

(206) ***laó-laó’***　*nya*　*bekranté*.
slowly　3　speak
「彼は**ゆっくり**話す。」

(207) *nya*　*bekranté*　***laó-laó’***.
3　speak　slowly
「彼は**ゆっくり**話す。」

[D] 動詞を述部の主要部とする文にのみ表れ、述部に先行するもの。

以下の副詞は動詞を述部の主要部とする文にのみ現れ、常に述部に先行する。（否定詞などと異なり、述部の直前に現れるとは限らないが、述部の後に現れることはない。）

(i) アスペクトを表すもの

muntu (発話時点において継続中の動作)、*beru’*（発話の直前に起こった動作）、*suda*「～し終える」などがある。

・*muntu* (発話時点において継続中の動作)「～しているところである」

(208) ***muntu***　*nya*　*mangan*.
PROGRESS　3　eat　「彼は今食事をし**ているところ**である。」

(208)’ *nya*　***muntu***　*mangan*.
3　PROGRESS　eat　「彼は今食事をし**ているところ**である。」

・*beru’*（発話の直前に起こった動作）「～したばかりである」

(209) ***beru’***　*nya*　*datang*　*kóta*.
just　3　come　here　「彼はここに来た**ばかり**である。」

(209)’ *nya* ***beru’*** *datang* *kóta*.
3 just come here 「彼はここに来た**ばかり**である。」

・*suda* 「～し終える」
(210) ***suda*** *ku=mangan*.
finish 1SG.LOW.AFFIX=eat 「私は食事を**終えた**。」

それぞれの副詞が述部の後に現れている(208)’’(209)’’(210)’のような文は容認されない。
(208)’’ **nya* *mangan* ***muntu***.
3 eat PROGRESSIVE
(期待される意味)「彼は今食事をし**ているところ**である。」

(209)’’ **nya* *datang* *kóta* ***beru’***.
3 come here just
(期待される意味)「彼はここに来た**ばかり**である。」

(210)’ **ku=mangan* ***suda***.
1SG.LOW.AFFIX=eat finish (期待される意味)「私は食事を**終えた**。」

(ii) モダルを表すもの
harós (義務)「～しなければならない」、*roa* 「～するのをよしとする」、*bau’* （実現、可能、許可）「～できる」などがある。
・*harós* (義務)「～しなければならない」
(211) ***harós*** *nya* *datang* *kóta’*.
have.to 3 come to.here
「彼はここに来**なければならない**。」

(211)’ *nya* ***harós*** *datang* *kóta’*.
3 have.to come to.here
「彼はここに来**なければならない**。」

・*roa* 「～するのをよしとする」
(212) ***roa*** *nya* *tu=suru’* *mentó-menta’*.
like 3 1PL.AFFIX=order like.this-like.this
「彼はあれこれと指示されてもよい。(人に言われて動くのが平気だ。)」

(212)’ *nya* ***roa*** *tu=suru’* *mentó-menta’*.
3 like 1PL.AFFIX=order like.this-like.this
「彼はあれこれと指示されてもよい。(人に言われて動くのが平気だ。)」

・*bau'*（実現、可能、許可）「～できる」

(213) ***bau'*** *nya* *datang* *kóta*.
can 3 come to.here 「彼はここに来ることが**できる**。」

(213)' *nya* ***bau'*** *datang* *kóta*.
3 can come to.here 「彼はここに来ることが**できる**。」

副詞 *harós, roa, bau'*がそれぞれ述部に後続する文は容認されない。

(iii) 頻度を表すもの

・*jarang*「めったに～しない」、*rajén*「よく～する」などがある。

・*jarang*「めったに～しない」

(214) ***jarang*** *nya=Amén* *datang* *kóta'*.
rarely TITLE=Amén come to.here
「アミンは**めったに**ここに来ない。」

(214)' *nya=Amén* ***jarang*** *datang* *kóta'*.
TITLE=Amén rarely come to.here 「アミンは**めったに**ここに来ない。」

・*rajén*「よく～する」

(215) ***rajén*** *nya=Amén* *datang* *kóta'*.
often TITLE=Amén come to.here 「アミンは**しょっちゅう**ここに来る。」

(215)' *nya=Amén* ***rajén*** *datang* *kóta'*.
TITLE=Amén often come to.here
「アミンは**しょっちゅう**ここに来る。」

副詞 *jarang, rajén* が述部に後続する文は容認されない。

(iv) 様態を表すもの

様態を表す副詞の中には、[C]で扱ったように文中での位置が自由であるものと常に述部の前に現れるものがある。その条件は今のところわからない。常に述部の前に現れる要素には以下のようなものがある。

kotar「早く～する」、*kotar-kotar*「急いで～する」、*balong-balong*「上手に～する」
rango-rango'「大きく～する」、*mèsa'*「一人で」、*mbang-mbang*「意外なことに」
ahér-ahér「しまいには」、*sibók*「忙しい」

balong-balong「上手に～する」の例を示す。

(216) ***balong-balong*** *nya* *pina=tepóng*.
nicely 3 make=cake 「彼は上手にお菓子を作る。」

(216)’ *nya*　***balong-balong***　*pina=tepóng*.
3　nicely　make=cake
「彼は上手にお菓子を作る。」

副詞 *balong-balong* が述部の後に現れる(216)’’のような文は容認されない。
(216)’’ **nya*　*pina=tepóng*　***balong-balong***.
3　make=cake　nicely
(期待される意味)「彼は上手にお菓子を作る。」

[D]に属する副詞のうち bau’「～できる」と(iv)の様態を表すものの一部は、副詞成分としてばかりでなく、複文の主文の述部としても機能する。たとえば、*sibók*「忙しい」は、副詞成分として機能する場合もあれば、述部の主要部として機能する場合もある。このような例については、第 8 章 5.1 で扱う。

8　名詞節

単文に名詞節形成詞が先行することによって、名詞句と同様の機能を持つ要素が形成されることがある。この要素を名詞節と呼ぶ。

名詞節形成詞には *adè* と *lók* の二種類がある。*adè* は、動詞あるいは副詞句、または前置詞句を述部の主要部とする文に先行し、述部の表す事態の主要な関与者（動作主体、動作の対象など）を表す。*lók* は文のタイプを問わず文を名詞化し、文の表す内容そのものを表す。それぞれについて以下 8.1、8.2 で順に述べる。

8.1　名詞節形成詞 *adè* が形成する名詞節

名詞節形成詞 *adè* は，*dè* という縮約形を持つ。この二つの形に意味的違いはない。縮約形は，独立した強勢を持たず，後続する語と一語であるかのように発話される。

(217) *adè*　*rango’*
NOM　big　「大きいの（もの、人）」

(217)’ *dè=rango’*
NOM=big　「大きいの（もの、人）」

adè は、動詞句、副詞句、前置詞句を述部の主要部とする文に先行し、後続する文を名詞化する。*adè* に後続する文は述部が先行し、その次に補語または副詞成分が現れるという語順をとる。

(218) *adè*　*datang*　*ké’*　*tau=Samawa’*.
NOM　come　to　person=Sumbawa　「スンバワ人と来た人」

（補語は単文においてそうであるのと同様、名詞節を構成する文においても必須の成分ではない。）

(219)のように補語が述部に先行する例は容認されない。

(219) **adè*　*ké'*　*tau=Samawa'*　*datang.*
NOM　with　person=Sumbawa　come
（期待される意味）「スンバワ人と来た人」

以下の部分では、述部の主要部の種類ごとに例を挙げる。

[A] *adè* が副詞句、前置詞句を述部の主要部とする文に先行する場合

副詞句、前置詞句が述部の主要部である場合、名詞節は副詞句、前置詞句の表す状況の主体に相当する事物を表す。

(220) *adè*　*pang'*　*balé*
NOM　at　house　「家にいるもの」

(221) *adè*　*kalés*　*Samawa'.*
NOM　from　Sumbawa　「スンバワから来たもの」

(222) *adè*　*sapèrap*
NOM　yesterday　「昨日のもの」

この場合、名詞節中に名詞節全体が表す事物に相当する補語（主体を表す名詞句補語）は現れない。たとえば(222)'のような文は容認されない。

(222)' *adè*　*sapèrap*　*pèsta*
NOM　yesterday　party　（期待される意味）「昨日のパーティ」

[B] *adè* が自動詞を述部の主要部とする文に先行する場合

自動詞が述部の主要部である場合、名詞節は、自動詞を述部の主要部とする文の主語に相当する意味、つまり、述部の表す状況の主体に相当する意味を表す。

(223) *adè*　*balong*
NOM　good　「いいもの，いい人」

(224) *adè*　*ka=teri'*
NOM　PERF=fall.down　「落ちたもの，落ちた人」

副詞句、前置詞句を述部とする文の場合と同様、この場合も名詞節の表す事物に相当する補語（この場合は主語）は名詞節中に現れない。

(225) **adè*　*ka=teri'*　***aku***
NOM　PERF=fall.down　1SG.LOW

（期待される意味）「落ちた者（である私）」

また、この場合、述部内に主語に相当する人称辞が現れることもない。たとえば、動詞 *teri* の主体が話し手であったとしても、述部内に 1 人称人称辞が現れることはない。

(226) **adè*　*ka=**ku**=teri'*
NOM　PERF=1SG.LOW.AFFIX=fall.down
（期待される意味）「落ちた者（＝私）」

(227) **adè*　*ka=**ku**=teri'*　***aku***
NOM　PERF=1SG.LOW.AFFIX=fall.down　1SG.LOW
（期待される意味）「落ちた者（である私）」

[C] *adè* が他動詞を述部の主要部とする文に先行する場合

他動詞が述部の主要部である場合、名詞節が表しうるのは、その述部が単文に現れる場合に名詞句補語として現れうる要素に相当する事物、つまり、動作主（単文における主語の指示物）、動作の対象（単文における目的語の指示物）、もののやりとりの受け手である。

まず、一般的な（「もののやりとり」を表すもの以外の）他動詞が述部の主要部である例を示す。この場合、名詞節は動作主体または動作の対象を表す。以下は他動詞 *kakan'*「食べる」が述部の主要部である例である。

(228) *adè*　*kakan'*
NOM　eat　「食べる人」または「食べられるもの」

自動詞が述部の主要部である場合と同様，この場合も名詞節中に，名詞節全体が表す関与者に相当する要素があらわれることはない。

(229)のように名詞節中に動作主を表す要素が現れている場合、名詞節は動作主を表すとは解釈されず、動作の対象を表すものと解釈される。これは動作の対象が(229)のように補語として現れている場合も、(230)のように述部内に現れている場合も同様である。

(229) *adè*　*ka=kakan'*　*léng*　*nya.*
NOM　PERF=eat　by　3
「彼が食べたもの」

(230) *adè*　*ka=**ku**=kakan'*
NOM　PERF=1SG.LOW.AFFIX=eat　「私が食べたもの」

また、(231)のように名詞節中に動作の対象を表す要素が現れている場合、名詞節は動作の対象を表すものとは解釈されず、動作主を表すものと解釈される。

(231) *adè*　*ka=kakan=tepóng=nan.*
NOM　PERF=eat=cake=that
「そのケーキを食べた人」

(231)のように名詞節内に動作の対象を表す補語が現れる場合，動作の対象を表す補語は，

その指示物が定であっても不定であっても述部と強勢の単位を構成する[15]。

さらに、動作主、動作の対象をあらわす補語両方が現れている(231)のような文は容認されない。（動作主，動作の対象どちらを表すものとしても容認されない。）

(231) **adè*　*ka=kakan=tepóng*　*léng*　*nya*
NOM　PERF=eat=cake　by　3

(228)にみられるように、他動詞が述部の主要部である場合、*adè* が導く名詞節は潜在的に意味のあいまいさを持つが、名詞節全体に相当する補語は名詞節内に現れないため、実際の発話では，(229)-(231)にみられるように、名詞節の表す内容（述部の主要部である動詞の表す状況と名詞節全体が表す内容の意味的関係）は必要に応じて表し分けられることになる。

次にもののやりとりをあらわす動詞の例を挙げる。ここでは動詞 *bèang'*「与える」の例を挙げる。*bèang'*「与える」を含む述部に *adè* が先行する場合、名詞節は動作主，やりとりされるもの，やりとりの受け手のいずれかを表す。

(233) *adè*　*ka=bèang'*
NOM　PERF=give
「与えた人」
「与えられたもの」
「与えられた（ものを受け取った）人」

一般的な他動詞の場合と同様、名詞節全体が表す事物に相当する補語は名詞節内に現れない。(234)のように、もののやり取りの受け手を指す要素、やりとりされるものを指す要素が名詞節内に現れている場合、名詞節は動作主を指すと解釈される。

(234) *adè*　*ka=bèang'*　*ku*　*lamong'*.
NOM　PERF=give　1SG.LOW.AFFIX　clothes
「私に服をくれた人」

(235)のように、動作主を指す要素、もののやり取りの受け手を指す要素が名詞節内に現れている場合、名詞節はやりとりされるものを指すと解釈される。

15　動作の対象が定であっても不定であっても音声的結合が起こるという点で、この現象は 6.8.2 で扱った抱合現象とは異なる性質のものである。抱合現象は動作の対象を表す事物が不定であることを示すという意味的な動機によるものであると考えられるが、この名詞節内における音声的結合は名詞節の境界を明確にするという統語的な動機によるものであると考えられる。

(235) *adè*　*ka=ku=bèang'*　*sia*　*léng*　*aku*
NOM　PERF=1SG.LOW.AFFIX=give　2SG.HIGH　by　1SG.LOW
「私があなたにあげたもの」

(236)のように、動作主を指す要素、やりとりされるものを指す要素が名詞句内に現れている場合、名詞句はもののやり取りの受け手を指すと解釈される。

(236) *adè*　*ka=ku=bèang'*　*lamong'*　*léng*　*aku*
NOM　PERF=1SG.LOW.AFFIX=give　clothes　by　1SG.LOW
「私が服をあげた人」

既に述べたように、一般的な他動詞を述部の主要部とする文が名詞節を形成する場合、動作の対象を表す補語は述部と強勢の単位を構成する。（例文(230)を参照されたい。）

一方、(236)に示したようにもののやりとりを表す他動詞を述部の主要部とする文が名詞節を形成する場合、やりとりされるものを表す補語が述部と強勢の単位を構成することはない。

この点で一般の動詞が述部の主要部である場合の目的語と、もののやりとりを表す動詞が述部の主要部である場合の目的語はふるまいが異なる。

(233)に見られるように、この場合も名詞節は潜在的に意味のあいまいさを持つが、名詞節全体の表す意味に相当する要素は名詞節中には現れないため、名詞節全体が表す意味は必要に応じて表しわけられることになる。

以上のことから、*adè* が導く名詞節の意味については以下のことがいえる。

adè が導く名詞節は、述部の主要部が副詞句、前置詞句、自動詞である場合は、述部が表す状況の主体を、述部の主要部が他動詞である場合は、述部の表す状況の動作主、動作の対象、やりとりの受け手を表す。さらに一般化すると、*adè* が導く名詞節は、それぞれの文で名詞句補語で表れうる要素に相当する意味を表すと言える。

また、*adè* が導く名詞節に、名詞節中に名詞節全体が表す事物に相当する補語が現れることはない。この言語の関係節はいわゆる「主要部外在型」であると言える。

8.2　名詞節形成詞 *lók* が構成する名詞節

名詞節形成詞 *lók* に文が後続した形は、文の内容をそのまま表す名詞節を構成する。（「～（文の内容）すること」という意味を表す。）

(237) *lók*　*nya*　*kakan'*　*tepong=nan.*
NOM　3　eat　cake=that
「彼がケーキを食べること。」

名詞節形成詞 *lók* は、日本語の「方法」「ようす」に相当する意味を表す同形の名詞に由来する。

名詞節形成詞*lók*はどのような文にも付接しうる。名詞節形成詞*adè*の場合と異なり、後続する文の文中では述部が先行する場合も補語が先行する場合もある。以下の例文では名詞節を[ ]に入れて示す[16]。

・*lók* が名詞句を述部の主要部とする文に先行している例

名詞節内で述部が補語に先行する例を(238)に、補語が述部に先行する例を(239)に挙げる。

(238) *nongka* *ku=to'* [***lók*** *nya* *ina'* *ku*]
NEG.PERF 1SG.LOW.affiix=know NOM 3 mother 1SG.LOW.AFFIX
「私は私の母親が彼女だということを知らなかった。」

・*lók*＋名詞句が述部の主要部である文（述部が補語に先行）

(239) *nongka* *ku=to'* [***lók*** *ina'* *ku* *nya*].
NEG.PERF 1SG.LOW.affiix=know NOM mother 1SG.LOW.AFFIX 3
「私は私の母親が彼女だということを知らなかった。」

・*lók* が副詞句を述部の主要部とする文に先行している例

名詞節内で補語が述部に先行している例を(240)に、述部が補語に先行している例を(241)に挙げる。

(240) *nongka* *ku=to'* [***lók*** *anó=ta* *anó-Jemat*].
NEG.PERF 1SG.LOW.AFFIX=know NOM day=this Friday
「私は今日が金曜だということを知らなかった。」

(241) *nongka* *ku=to'* [***lók*** *anó-Jemat* *anó=ta*].
NEG.PERF 1SG.LOW.AFFIX=know NOM Friday day=this
「私は今日が金曜だということを知らなかった。」

・*lók* が前置詞句を述部の主要部とする文に先行している例

名詞節内で補語が述部に先行している例を(242)に、述部が補語に先行している例を(243)に挙げる。

(242) *nongka* *ku=to'* [***lók*** *tau=nan* *pang'* *Samawa'*].
NEG.PERF 1SG.LOW.AFFIX=know NOM person=that at Sumbawa
「私はその人がスンバワにいることを知らなかった。」

(243) *nongka* *ku=to'* [***lók*** *pang'* *Samawa'* *tau=nan*]
NEG.PERF 1SG.LOW.AFFIX=know NOM at Sumbawa person=that
「私はその人がスンバワにいることを知らなかった。」

---

16 主文中の名詞節の位置については第 8 章 2 で示す。

・*lók* が動詞を述部の主要部とする文に先行している例

名詞節内で補語が述部に先行している例を(244)に、述部が補語に先行している例を(245)に挙げる。

(244) *nóngka*　*ku=to'*　[***lók***　*nya*　*kakan'*　*tepóng=nan*].
NEG.PERF　1SG.LOW.affiix=know　NOM　3　eat　cake=that
「私は彼がケーキを食べたことを知らなかった。」

(245) *nongka*　*ku=to'*　[***lók***　*kakan'*　*tepóng=nan*　*léng*　*nya*].
NEG.PERF　1SG.LOW.affiix=know　NOM　eat　cake=that　by　3
「私は彼がケーキを食べたことを知らなかった。」

lók 名詞節は、(238)-(245)のように複文の一部として現れるだけでなく、単独で現れる場合もある。

以下に物語からの例(246)と(247)を示す。

(246)は引用部分が長いため、直接の引用部分に先行する部分の日本語訳をまず示し、その後で当該のスンバワ語文と日本語訳を提示する。

(246)

スンバワの軍勢は、*Datu*（貴族の位階の一つ）に指示を受け、スンバワ港へ行き、ポルトガル軍と戦った。我々のスンバワ軍は、たくさんの死者を出した。それを知って *Datu* はスンバワへ来て、言った。

wai　*tentara=Portugés,*　[***lók***　*ka=mu=tengan-tengan'*
hey　army=Portuguese　that　PERF=2SG.LOW.AFFIX=brave

rék　*tana'*　*Samawa=ta,*　*pè*].
step.on　ground　Sumbawa=this　isn't.it?

engka　*mu=to'*　*jago=kami*　*ké'*
NEG.PERF　2SG.LOW.AFFIX=know　power=1PL.EXCL　INTERR
「ポルトガル軍よ、勇敢にもスンバワの土地に足を着けるとは。私たちの力を知らないのか。」[DPG017]

(247) *serèa'*　*endèng'*　*balé*　*né.*
all　beside　house　you.know

sai　*ya=tengan'*　*bléng-bléng,*　*ada'*　*lampu*　*tu*　*n=dalam*　*blék*　*né.*
who　CONS=brave　say　exist　light　1PL.AFFIX　at=inside　tin　you.know

[***lók***　*nó*　*barua*　*dèan*].
NOM　NEG　have.good.manners　that
「(昔の日本兵の柄の悪さを語る文脈で)近所全体見ても、おしゃべりをする勇気のあるものはいなかったよ。ランプを缶の中に入れて（暗くして）いたね。あの人たちの柄の悪い**ことといったら**。」[PA 145]

*lók*節が単独で現れるのは、話者がそこまで見てきたり、述べてきたりした内容を総括して何かを述べる場合であることが多いようである。また、(246)(247)のように*lók*節が単独で現れるのは、節全体が表す内容が話者にとって意外な状況、驚くべき状況である場合が多い。

lók 名詞節が他の文の一部となる場合の現れ方については複文の項（第 8 章 8.2）で扱う。

9　動詞連続

二つの動詞が統語的にも音声的にも一つの単位を形成していると考えられる場合がある。ここではそのような場合について述べる。このような単位が観察されるのは、先行する動詞が、*laló*「行く」、*mólé'*「帰る、戻る」、*datang*「来る」など移動を表す自動詞である場合である。記述の便宜上、以下の部分では、先行する動詞を動詞 1、後続する動詞を動詞 2 と呼ぶ。

この構文においては、動詞 1 の表す状況の主体と、動詞 2 の表す状況の主体は常に同一で、動詞 2 は動詞 1 の表す動作の目的を表す。(全体で「～しに行く」「～しに来る」などの意味を表す。)

ここでは動詞 1 が *laló*「行く」である例を挙げる。まず、動詞 2 の主要部が自動詞である場合を扱う。ここでは動詞 1 と動詞 2 は強勢の単位を形成し、一つの単語のように発音される。

(248)　*nya=Amén*　***laló=bakedèk***.
TITLE=Amén　go　play
「アミンは遊びに行く。」

この場合動詞 1 と動詞 2 は必ずこの順序で連続して現れる。それぞれの動詞の表す状況の主体は名詞句補語の形で一度だけ現れ、動詞 1 と動詞 2 の連続体に先行しても後続してもよい。

(248)に対応する(249)のような文も容認される。

(249)　***laló=bakedèk***　*nya=Amén*.
go=play　TITLE=Amén
「アミンは遊びに行く。」

動詞 1 と動詞 2 の間に補語が現れる(250)のような文は容認されない。

(250)　**laló*　*nya=Amén*　*bakedèk*.
go　TITLE=Amén　play

この場合、述ぶ内において動作主を表す人称辞は(251)のように、動詞 1 にのみ現れる。動詞 2 に人称辞が現れている(252)(252)'のような文は容認されない。

(251)　*ku=**laló**=**bakedèk**.*
1SG.LOW.AFFIX=go=play
「私は遊びに行く。」

(252)　**laló=ku=bakedèk*
go=1SG.LOW.AFFIX=play
（期待される意味）「私は遊びに行く。」

(252)’ **laló　ku=bakedèk*
go　1SG.LOW.AFFIX=play
（期待される意味）「私は遊びに行く。」

次に動詞 2 の主要部が他動詞である例を挙げる。
この場合も動詞 1 と動詞 2 は強勢の単位を形成する。
この場合、補語は動詞 2 が単独で述部を形成する際の補語と同様の形で現れる。(253)-(254)に例を示す。

(253)　*nya=Amén*　***laló=buya***　*lamong=nan*
TITLE=Amén　go=look.for　clothes=that
「アミンはその服を探しに行った。」

(254)　***laló=buya***　*lamong=nan*　*léng*　*nya=Amén*.
go=look.for　clothes=that　by　TITLE=Amén
「アミンはその服を探しに行った。」

(253)(254)いずれにおいても、動詞 1 の表す状況の主体と動詞 2 の表す状況の主体は同一（「アミン」）で、それを指す要素 *nya=Amén* は(253)のように動詞に先行する場合は名詞句補語として現れ、(254)のように動詞に後続する場合は前置詞句補語（前置詞 *léng* の句）として現れている。これは他動詞構文にみられる特徴である。このことから文全体が自動詞構文であるか他動詞構文であるかは、動詞 2 の主要部が自動詞か他動詞かによって決まるということがわかる。

(255)　*lamong=nan*　***laló=buya***　*léng=nya=Amén*.
clothes=that　go=look.for　by=TITLE=Amén.
「アミンはその服を探しに行った。」

動詞 2 が自動詞である場合と同様、述部内で人称を表す要素は動詞 1 の前に現れ、動作主を現す補語と相互照応を示す。

(256)　*lamong=nan*　***ku**=laló=buya*　***léng***　***aku***.
clothes=that　1SG.LOW=go=look.for　by　1SG.LOW
「私はその服を探しに行った。」

以上示した(i) 二つの動詞が常に連続して現れ、強勢の単位を形成する。(ii) 補語が動詞 2 に対応する形で現れるという二つの特徴から、この構文においては、動詞 1 と動詞 2 が一つの述部として機能しているといえる。

二つの動詞が何らかの統語的、意味的結びつきを示す場合は上記の構文以外にもあるが、それらはいずれも上記(i)(ii)のような特徴を持たない。本稿では、上記の構文のみを動詞連続とみなす。それ以外の構文は、二つの述部が存在するものとみなし、複文と呼ぶことにする。複文については第 8 章で扱う。

１０　複数の文の成分に現れる要素（否定詞、叙法辞、限定詞）

小辞のうち否定詞、限定詞、叙法辞は複数の文の成分に現れる。否定詞は述部内または副詞成分内に、限定詞と叙法辞は(i)述部内、(ii)補語内、(iii)副詞成分内、(iv)単文内のいずれかに現れる。以下の部分では、これらの小辞について順に述べる。

10.1　否定詞

スンバワ語には二つの否定詞、*nó, siong'*がある。否定詞は、述部内または副詞成分内に現れる。(257)(259)は述部内に否定詞が現れている例、(258)(260)は副詞成分内に否定詞が現れている例である。

(257) ***nó*** *kakan=jangan'* *nya*
NEG eat=fish 3
「彼は魚を食べない。」

(258) ***nongka*** (*nó+ka*) *jarang* *nya* *datang* *kóta'*.
NEG.PERF rarely 3 come to.here
「彼はめったにここにこないわけではない。」

(259) ***siong'*** *si* *kalés=Samawa'* *tau=nan*.
NEG MM from=Sumbawa person=that
「その人はスンバワ出身ではない。」

(260) ***siong'*** *pang'* *Samawa'* *tedu* *nya*.
NEG at Sumbawa stay 3
「彼はスンバワに滞在しているわけではない。」

第 4 章 2.5.3 で述べたように、*nó* は，アスペクト辞 *ka* や叙法辞のうち *si* 「対比」、*mo* 「起動、妥当」、*po*「条件」と以下のような複合形を形成する。

（以下に示したそれぞれの複合形の意味はおおまかなものである。詳しくはそれぞれの項で述べる。）

nó+ka	***nongka***または***engka***	「過去」の否定または状態の否定
nó+ si	***nó.si***	「非過去」の否定
nó+si+ka	***nó.soka***[17]	***nongka***の表す状況の強調
nó+mo	***nó.mo***	かつて成立していた状況の否定 「もはや～しない」
nó+mo+ka	***nó.mongka***	かつて成立していた状況の否定 「もはや～しなかった」
nó+po	***nó.po***	未然「まだ～しない」
nó+po+ka	***nó.poka***	未然「まだ～していない」

これらの複合形は、通常、動詞句を主要部とする述部内にあらわれるが、次のように、否定の対象となる状況が先行する文などから明確である場合は、単独で（動詞なしで）述部を構成する場合もある。

(261) (a)　*tau=nan*　***nó.poka***　*datang*?
　　person=that　not.yet　come
　(b)　***nó.poka.***
　　not.yet
　(a)「その人はまだこないんですか。」(b)「まだです。」

否定詞についての詳細は第 6 章 2 で述べる。

10.2　限定詞

限定詞 *baè* は、(i)述部、(ii)補語、(iii)副詞成分、(iv)単文のうちいずれかの構成要素として現れる。

(262)は *baè* が述部に現れている例 (263)は補語に現れている例､(264)は副詞成分に現れている例である。

(262)　*nangés*　***baè***　*tódé-tódé=nan*.
　　cry　only　children=that
　　「そのこどもたちは泣くだけだ。」

(263)　*tódé-tódé'*　***baè***　*nangés*.
　　children　only　cry　「こどもたちだけが泣く。」

17　第４章の 2.5.3（註 24）に示したように、テキストでは、規則的な形*nó.sika*も確認されている。

(264) *anó-Ahad* ***baè*** *nya* *datang*.
Sunday only 3 come
「日曜だけ彼は来る。」

(265)では *baè* は文末に現れている。このような文は、*baè* の示す限定が文全体の表す内容にかかるか直前の成分の表す内容にかかるかによって意味のあいまいさが生じる。

(265) *datang* *tódé-tódé'* ***baè***.
come children only
[1] *baè* が文全体にかかる場合「こどもたちが来ただけだ。」
(他には何も起こらなかった。)
[2] *baè* が補語にのみかかる場合「こどもたちだけが来た。」

baè は[1]の場合は文全体の構成要素であると解釈され、[2]の場合は補語の構成要素であると解釈される。

10.3　叙法辞

叙法辞は文の命題に対する話者の心的態度を表す。叙法辞には、次の四種類がある。

(i) *ké'* （不確定）当該の命題が正しいかどうかが話者にとって不確かであることを伝える場合に用いられる。（主に疑問文で用いられる。）

(ii) *mo* （起動・妥当）述部の主要部が持続時間を持つ状況を表す場合は、その状況の開始を表す。また、当該の命題の表す状況の実現を話者が妥当なものであるととらえていることも示す。

(iii) *po* （必要な条件）当該の命題の表す状況が別の状況が生起するための条件であることを伝える場合に用いられる。

(iv) *si* （対比）当該の命題と何らかの形で対比されうる命題を話者が想定している場合に用いられる。

叙法辞は、述部内、補語内、副詞成分内に、または文全体の構成要素として現れる。ここでは *ké'*の例を挙げる。(266)は *ké'*が補語内に現れている例、(267)は述部内に現れている例、(268)は副詞成分内に現れている例、(269)は文全体の構成要素として現れている例である。

(266) *nya* ***ké'*** *datang*?
3 INTERR come
「（他の人でなく）彼が来るのですか？」

(267) *datang* ***ké'*** *nya*?
come INTERR 3
「彼は（来なかったのでなく）来ますか？」
「（他の人でなく）彼が来ますか？」

(268) *pang'*　*hotèl*　***ké'***　*nya*　*tedu*?
at　hotel　INTERR　3　stay
「彼は(他の場所ではなく)ホテルに滞在しているのですか？」

(269) *nya*　*tedu*　*pang'*　*hotèl*　***ké'***?
3　stay　at　hotel　INTERR
「彼はホテルに滞在しているのですか？」
「（他の人でなく）彼がホテルに滞在しているのですか？」
「彼は（他の場所でなく）ホテルに滞在しているのですか？」

叙法辞は、その文中での位置によっては文の情報構造を示す機能を持つ場合もある。そのような機能は、叙法辞が補語または副詞成分内に現れる場合に観察される。

(266)においては、述部に先行する補語内に叙法辞が現れている。このような文は、補語の表す内容が伝達の焦点であることを示す。（同様の例について、既に 6.3.4 で触れた。例は(126)-(129)である。）

一方、(267)のように、述部内に叙法辞が現れている場合は、叙法辞 *ké'*の位置によって伝達の焦点が明示されることはない。(267)のような文は、補語の表す内容が焦点である場合も（「（他の人ではなく）彼が来るのですか？」）、述部の表す内容が焦点である場合も（「彼は（来ないのではなく）来るのですか？」）用いられる。

(268)においては、副詞成分内に叙法辞が現れている。このような文は、副詞成分の表す内容が談話の焦点であることを示す。

一方、(269)のように叙法辞 *ké'*が文末に置かれている場合は、叙法辞 *ké'*の位置によって伝達の焦点が明示されることはない。(269)のような文は補語の表す内容が焦点である場合も（「(他の人ではなく)彼がホテルに滞在しているのですか？」、副詞成分の表す内容が焦点である場合も（「彼は（他の場所でなく）ホテルに滞在しているのですか？」)、述部の表す内容が焦点である場合も（「彼はホテルに（滞在していないのではなく）滞在しているのですか？」）用いることができる。

逆に言えば、このような複数の解釈を受けることができるため、(269)のような場合叙法辞 *ké'*は直前の構成要素である副詞成分 *pang' hotèl* の構成要素でなく、文全体の構成要素であるとみなすことができる。

(i)-(iv)の叙法辞は、その表す内容だけでなく、現れうる統語的位置や談話的機能の点でも少しずつ異なっている。第７章ではこのような点も含め、叙法辞の機能についてさらに詳しく述べる。